

# 野口廃寺発掘調査概要報告書

平成16年11月

加古川市教育委員会

# 野口廃寺発掘調査概要報告書

平成16年11月

加古川市教育委員会

## 序 文

加古川市は豊かな自然に恵まれ、近年では播磨臨海工業地域の一員としても発展しています。市域には約620ヶ所もの埋蔵文化財が存在しています。今回、その内のひとつである野口廃寺が発掘調査されました。野口廃寺は奈良時代創建の寺院跡で、野口神社境内が想定範囲となっており、古瓦が散布することが知られていました。しかし、今まで本格的な発掘調査は実施されていませんでした。今回、国庫補助事業による範囲確認調査によって、平成6年度と平成7年度の2次にわたって発掘調査が実施されました。その結果、塔跡、講堂跡などの重要な遺構が確認されました。本書はその調査成果をまとめた報告書です。

この報告書が当市の古代の姿を理解する上で一助となれば幸いです。

また、今回の調査に際してご指導・ご協力いただいた諸先生方、兵庫県教育委員会、加古川市文化財審議委員会、並びに地元の方々に感謝申し上げます。

平成16年11月

加古川市教育委員会

教育長 山 本 勝

## 例　　言

1. 本書は加古川市野口町野口326に所在する野口廃寺の発掘調査として、平成6年から平成7年にかけて加古川市教育委員会が実施した発掘調査の概要報告書である。

2. 平成6年度調査は加古川市教育委員会、岡本一士・西川英樹が担当した。平成7年度調査は西川英樹が担当した。

### 発掘調査作業員

田中鉄二・中山茂・岩佐力三・佃徳光・間處康成・棗垣忠司・赤松正一・大西龍男・大西捨夫・遠藤譽之・宮田耕平・磯野良一・児鶴美佳子・石原佳織・采野尚子・柿本ゆり子・高松八重子・南良子

3. 本書の編集は以下の分担で行った。

報告書執筆　西川　英樹

出土遺物整理・拓本・実測図・レイアウト

蛭田朱美・西川美佳・田辺文子・福田あゆみ・森川祐子・谷三鈴・津村久美子・村津多佳子・森田陽一・原一司・三浦伸一・元田晶子・坂本美智代・栗原奈未・松本愛希重・藤田薰・室田小百合

4. 本書に使用した座標は、国土座標第V系を使用している。標高は東京湾平均海水準を基準とした。

5. 本報告にかかる遺物、写真、図面は、加古川総合文化センター博物館に保管されている。

6. 航空写真的撮影及び遺構測量図の作成は、株式会社バスコに委託した。

7. 土器実測図面は、土師器断面を黒塗りとし、須恵器断面を白くしている。

8. 報告書作成において、京都府立大学助教授菱田哲郎氏からは、多くの教示を得た。土器について、兵庫県教育委員会森内秀造氏から教示を得た。また、発掘調査・報告書作成に関して、以下の方々の助言・指導があった。上原真人氏(奈良国立文化財研究所)・工楽善通氏(奈良国立文化財研究所)・高井悌三郎氏・今里幾次氏・真野修氏・足立良子氏・広瀬勝美氏・井内潔氏・櫃本誠一氏・長谷川真氏・村上裕道氏・村上賢治氏(兵庫県教育委員会)・竹原伸二氏(枚方市教育委員会)・津川千恵氏(三田市市史編纂担当専門員)・稻原昭嘉氏(明石市立文化博物館)。記して感謝します。

# 目 次

## 本文目次

第1章 遺跡の位置と周開の歴史的環境.....	1
第2章 調査の成果.....	6
第1節 調査の概要.....	6
第2節 遺構.....	6
1. 講堂跡.....	6
2. 小堂宇跡.....	10
3. 土壘状遺構.....	14
4. 塔跡.....	14
5. 北東建物跡.....	17
6. その他の調査区.....	22
第3節 遺物.....	22
第3章 考察.....	40

## 挿図・表目次

第1図 野口廃寺位置図.....	3
第2図 周辺遺跡分布図.....	4
第3図 トレンチ配置図(平成6年).....	7
第4図 トレンチ配置図(平成7年).....	8
第5図 トレンチ配置図(平成6・7年).....	9
第6図 講堂跡調査区平面図.....	11
第7図 講堂跡基壇北面平面図.....	12
第8図 講堂跡・小堂宇跡瓦積基壇実測図.....	13
第9図 小堂宇跡調査区平面図.....	15
第10図 小堂宇跡基壇北面平面図.....	16
第11図 塔跡調査区平面図.....	18
第12図 塔跡瓦積基壇実測図.....	19
第13図 土壘状遺構調査区配置図.....	20
第14図 北東建物跡調査区平面図.....	21

第15図	調査区8平面図	23
第16図	全体遺構配置図	24
第17図	軒丸瓦実測図	29
第18図	軒平瓦実測図	31
第19図	丸瓦実測図	34
第20図	平瓦実測図	35
第21図	出土土器実測図	39
第22図	範傷等位置図	48
第23図	野口庵寺跡実測図(播磨上代寺院址の研究より)	50
第1表	周辺遺跡分布図地名表	5

## 写真図版目次

- 写真図版1 野口庵寺周辺航空写真 1
- 写真図版2 野口庵寺周辺航空写真 2
- 写真図版3 講堂跡調査写真 1
- 写真図版4 講堂跡調査写真 2
- 写真図版5 講堂跡調査写真 3
- 写真図版6 講堂跡調査写真 4
- 写真図版7 小堂字跡調査写真 1
- 写真図版8 小堂字跡調査写真 2
- 写真図版9 土壘状遺構調査写真
- 写真図版10 北東建物跡調査写真
- 写真図版11 塔跡調査写真 1
- 写真図版12 塔跡調査写真 2
- 写真図版13 軒丸瓦写真
- 写真図版14 軒丸瓦写真
- 写真図版15 軒丸瓦・軒平瓦写真
- 写真図版16 軒平瓦写真
- 写真図版17 軒平瓦写真
- 写真図版18 軒平瓦写真
- 写真図版19 鳥尾・丸瓦・平瓦写真
- 写真図版20 平瓦写真
- 写真図版21 平瓦・土器写真
- 写真図版22 半瓦・土器写真

## 第1章 遺跡の位置と周囲の歴史的環境

野口廃寺は、加古川市野口町野口326に所在する野口神社の境内を想定寺域としている。野口神社はその縁起によれば、約350年前頃に創建されたという。比叡山麓の日吉神社から御分靈を迎え、のち4柱の神を合わせて祀ったとも言う。山王五社宮と称していたが、明治時代の初めに野口神社と称するようになった。境内は東西約109m、南北約145mの長方形を呈し、その範囲が野口廃寺想定寺域となっている。境内地周囲には幅約2～3mの溝がめぐり、その内側には土塁が巡らされている。社殿は南面して建ち、拝殿の前面までは、盛土によって整地されているが、その背後には、雑木林、竹藪が広がっている。この叢林中に、多くの古瓦片が散布し、基壇状の隆起も存在した。

野口廃寺が所在する野口町およびその東側の平岡町は、現海岸線と平行に、西北西から東南東に続く段丘群の階段状地形が発達している。各段丘面間には段丘と同方向の浅い凹地が続いており、水田や溜め池として利用されている。古代山陽道もこの方向に沿って、想定されている。野口廃寺は、野口段丘1-1面上に立地する。

周辺で最古の遺跡は、平岡町山之上に所在する山之上遺跡である。この遺跡は、1962年に浅原重利氏によって発見された。1976～1977年に包含層確認調査が実施された。その結果ナイフ形石器など、多数の旧石器が採集された。また、平成13年度には加古川市教育委員会によって、住吉神社南側隣接地が調査され、弥生時代後期の土壌や溝が検出された。平岡町高畠には、弥生時代中期から後期の集落跡である長畠遺跡が存在する。平成元年に発掘調査が実施され、竪穴住居跡8棟が検出された。野口町坂元には、弥生時代から鎌倉時代の複合遺跡である坂元遺跡が存在する。平成15年度の発掘調査では、弥生時代の方形周溝墓群などが検出された。平成16年度の発掘調査では、奈良時代の掘立柱建物跡が多数検出された。野口町長砂の段丘部分には、弥生時代後期の集落跡である長砂遺跡が存在する。また、この遺跡と同位置に、聖陵山古墳が存在する。この古墳は全長約70mで、前方部を南西方向に向いている。前方後円墳説と前方後方墳説がある。現在、削平を受けた前方部の上に円長寺という寺院が建てられている。円長寺の寺伝によれば、天文12年(1544)に「洞穴」から「矢鐵十有二本」を得たという。また、1903年に内務省に提出した『具状書』によれば、1874年に、前方部上に寺院を移築した際、「土ノ中ヨリ一ノ石函ヲ掘り出した」という。さらに1877年には後円部(後方部)を地ならしした際、「大ナル石函」を掘り出したという。現在、寺院内に、竪穴式石室の大井石と思われる板状の石が4個残されている。また、定角式銅鏡7本が寺に残されている。

奈良時代の遺跡としては、駅ヶ池の南西にある大歳神社境内周辺を想定範囲とする古大内遺跡が存在する。大歳神社には、原位置から動かされた礎石10数個が残され、周辺を掘削すると多量の古瓦片が出土する。そのため、かつてはこの地を「古大内廃寺」と呼んでいたが、塔・金堂などは検出されていない。出土する瓦類は、今里幾次氏が提唱する「播

磨國府系瓦」のうち「国分寺式」、「古大内式」、「本町式」、「野条式」、「毘沙門式」などの各種で、現在ではこの遺跡が賀古駅家跡と考えられている。また、この遺跡の北側に古代山陽道跡が想定されている。加古川市教育委員会は、平成元年と15年に、平岡町高畠において、古代山陽道跡の発掘調査を実施したが、遺構を確認するには至らなかった。しかし、明石市教育委員会は、清水遺跡、福里遺跡の2ヶ所で、古代山陽道の推定ライン上に道路遺構を検出した。その他の遺跡としては、平岡町横蔵寺周辺から、野口式軒丸瓦および古大内式軒丸瓦が出土しているが、その性格は不明である。

野口廃寺の隣に位置する教信寺は、境内が加古川市指定史跡となっている。沙弥教信は、平安時代前期の僧で、野口の地に草庵を構え、昼夜念佛を唱えることに専念した念佛者の先駆者であった。後に、親鸞が、「われはこれ賀古の教信沙弥の定なり」(『改邪録』)といったり、一遍が臨終を教信寺で迎えないと願うほど尊敬された。一遍の弟子、湛阿によつて、元亨3年(1323)に不斷念佛が興行され、その後、寺勢が拡大した。しかし、天正6年(1578)の野口合戦において、野口城に隣接していたため、兵火に会い、伽藍のすべてが焼失し、以後寺勢が衰えた。

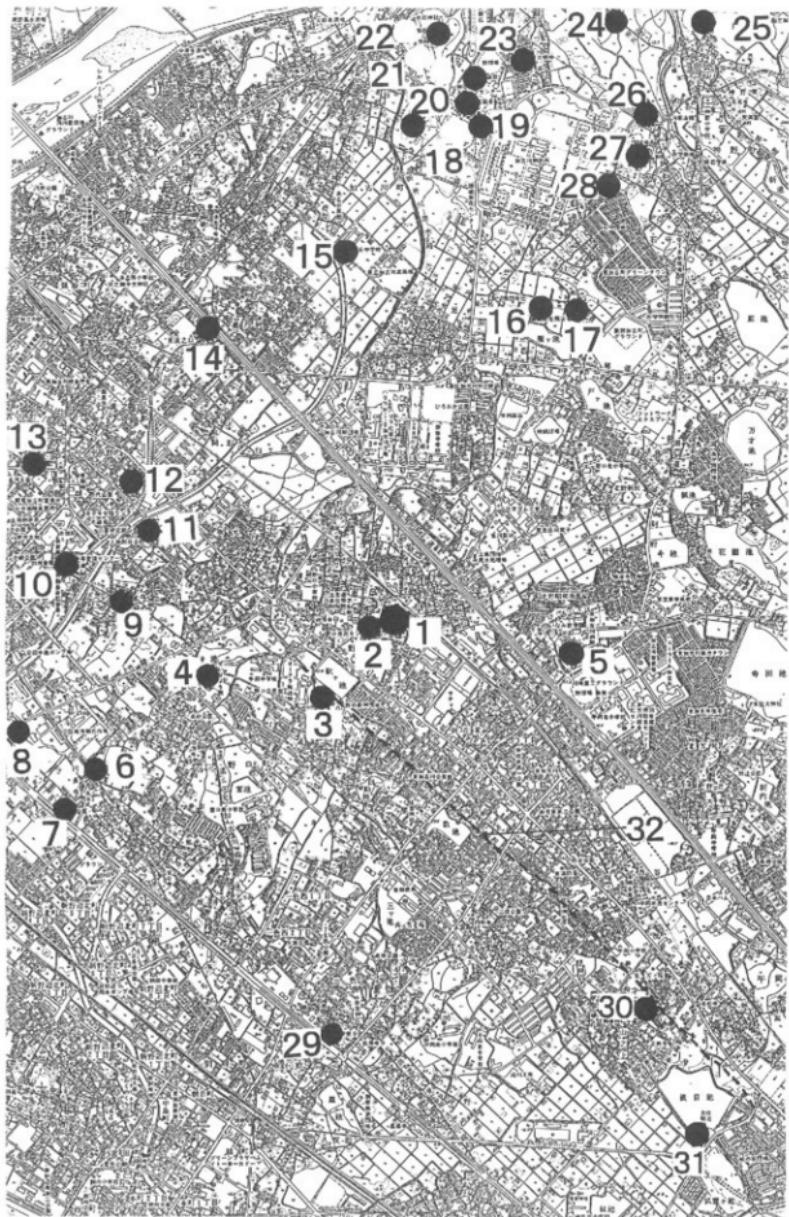
中世の遺跡としては、長砂構居跡、横倉城跡、野口城跡などが存在するが、いずれも本格的な発掘調査は実施されていない。長砂構居は、『播州古城記』によれば、城主は越生市右衛門である。横倉城は『播磨諸大家系譜』によれば、城主は野口新十郎である。野口城は、『別所長治記』『播州御征伐之事』『播州古城記』などによれば、城主は長井四郎左衛門である。天正6年(1578)の野口合戦の時、3日間の攻防で、羽柴秀吉の軍に攻め落とされたという。城跡の正確な位置は不明である。野口神社の南西に「構ノ谷」、「竹ノ下」という小字がある。竹は館の転ではないかといわれる。また、その少し北には、字「前田」があるが、そこは「城の上」と言われている。これらの土地に囲まれた字「岡」の地が最も有力な比定地とされている。

#### 参考文献

- 『加古川市史第1巻』 加古川市 1989年
- 『加古川市史第4巻』 加古川市 1996年
- 『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』 兵庫県教育委員会 1982年
- 今里幾次『播磨古瓦の研究』 1995年
- 『太寺廃寺と高家寺』 明石市立文化博物館 2004年



第1図 野口廃寺位置図



第2図 周辺遺跡分布図

番号	名 称	所 在 地	時 代	種 類
1	野口廃寺	加古川市野口町野口	奈良・平安	寺院跡
2	野口城跡	加古川市野口町野口	中世	城跡
3	古大内遺跡	加古川市野口町古大内	奈良・平安	駅家跡
4	長砂構居跡	加古川市野口町長砂	中世	城跡
5	横倉城跡	加古川市平岡町新在家	中世	城跡
6	聖陵山古墳	加古川市野口町長砂	古墳	古墳
7	浜の宮遺跡	加古川市尾上町口里	弥生・古墳	集落跡
8	尾上遺跡	加古川市尾上町安田	弥生・古墳	集落跡
9	細田構居跡	加古川市野口町良野	中世	城跡
10	北在家遺跡	加古川市加古川町北在家	弥生・古墳	集落跡
11	具平塚古墳	加古川市野口町良野	古墳	古墳
12	平野遺跡	加古川市加古川町平野	弥生	集落跡
13	栗津遺跡	加古川市加古川町栗津	弥生・古墳	集落跡
14	溝之口遺跡	加古川市加古川町溝之口・美乃利	弥生～中世	集落跡
15	美乃利遺跡	加古川市加古川町大野・美乃利	弥生～中世	集落跡
16	水足 1号墳	加古川市野口町水足	古墳	古墳
17	水足 2号墳	加古川市野口町水足	古墳	古墳
18	勅使塚古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
19	東車塚古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
20	南大塚古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
21	西大塚古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
22	ひれ墓古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
23	北大塚古墳	加古川市神野町日岡苑	古墳	古墳
24	石守構居跡	加古川市神野町石守	中世	城跡
25	手末構居跡	加古川市神野町東神野	中世	城跡
26	石守廃寺	加古川市神野町石守	奈良・平安	寺院跡
27	石守 1～3号墳	加古川市神野町石守	古墳	古墳
28	石守 4・5号墳	加古川市神野町石守	古墳	古墳
29	一色構居跡	加古川市平岡町一色	中世	城跡
30	長畠遺跡	加古川市平岡町長畠	弥生	集落跡
31	山之上遺跡	加古川市平岡町山之上	旧石器～弥生	散在地・集落跡
32	古代山陽道	加古川市平岡町～野口町	奈良・平安	道路跡

第1表 周辺遺跡分布図地名表

## 第2章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

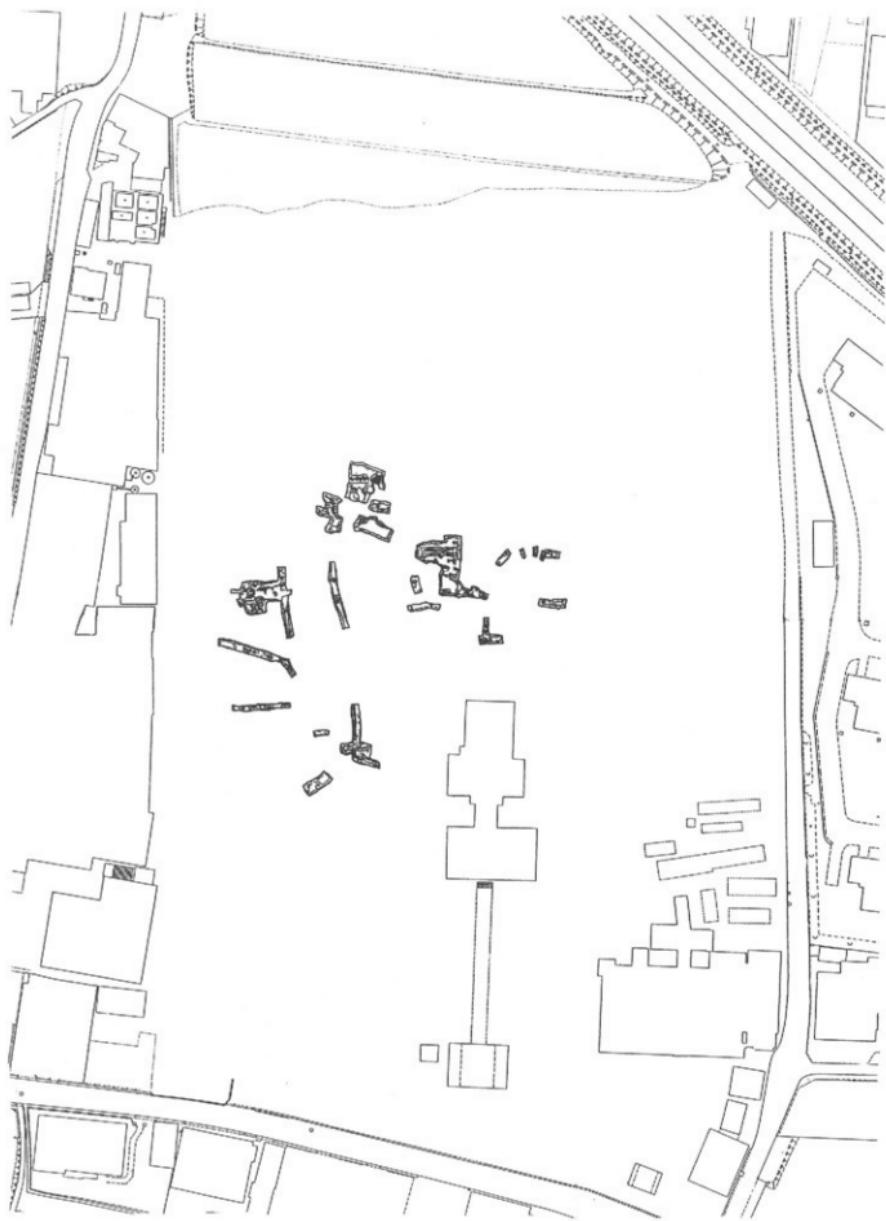
野口施寺は、20,000m<sup>2</sup>の面積を有する野口神社の境内に所在する。以前から古瓦が出土する事で知られていた。昭和17年刊行の鎌谷木三次著『播磨上代寺院址の研究』によつて、紹介と分析がなされ、白鳳時代の寺院と考えられた。その後、今里幾次氏や井内功氏・井内潔氏によつて、瓦の研究が積み重ねられたが、発掘調査による伽藍配置の究明は長年にわたり行われていなかつた。そのため、加古川市教育委員会は伽藍配置の解明を目的として、平成6、7年度に2年間にわたつて発掘調査を実施した。平成6年度の発掘調査は、8月1日から9月30日まで実施した。調査面積は約600m<sup>2</sup>である。また、平成7年度の発掘調査は、平成8年2月5日から3月29日まで実施した。調査面積は約500m<sup>2</sup>である。調査の結果、平成6年度は講堂跡、小堂宇跡などが検出された。平成7年度は塔跡、北東建物跡などが検出された。調査区は、植生、地形などの制約があり、方形に設定できていない箇所が多くある。

### 第2節 遺構

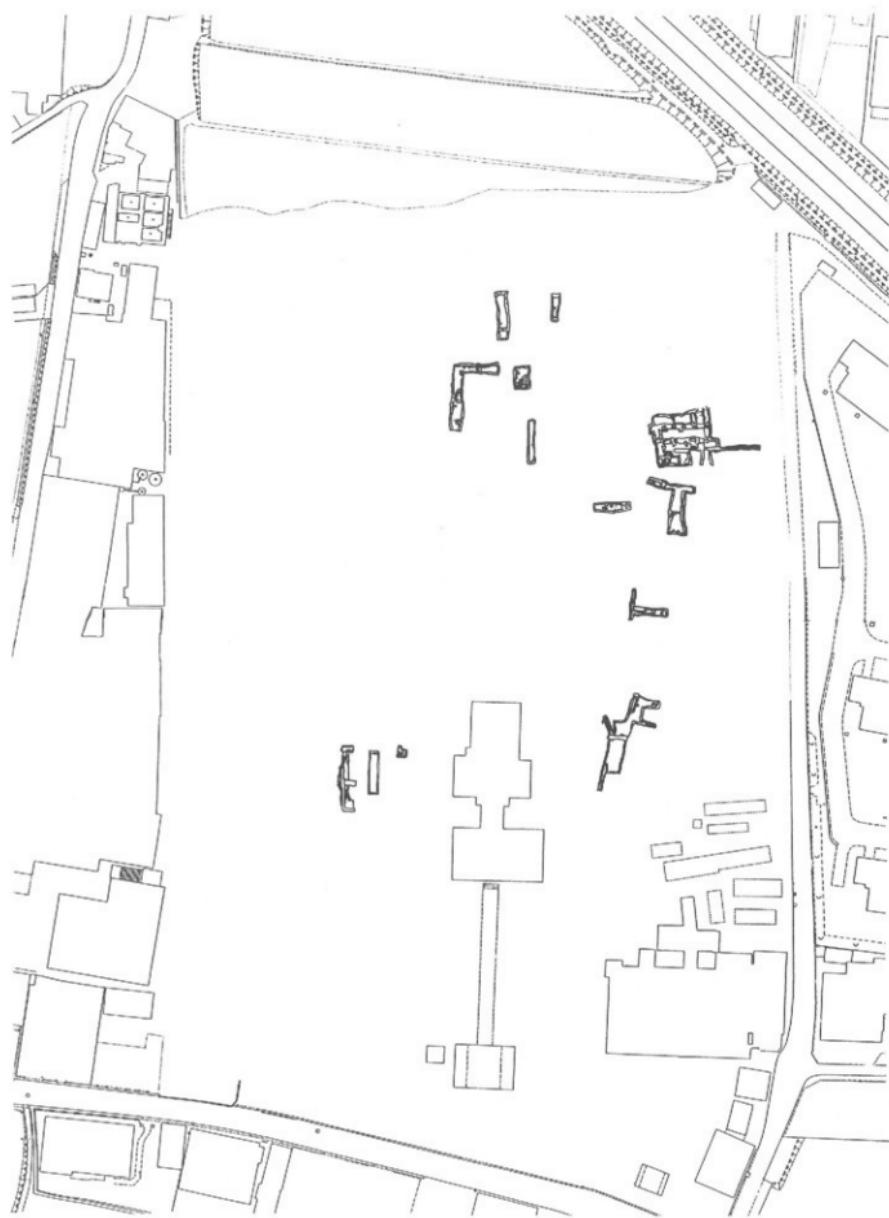
#### 1. 講堂跡

昭和17年に刊行された鎌谷木三次著『播磨上代寺院址の研究』には、「幣殿の西側即ちA地付近では小規模ながらも地形が一段と高くなり、雜木の根元には現に夥しい古瓦破片の潜んでいるのが目観され、更に本殿に接するB地付近にも長径約20m、主軸を東西に横へた梢円形の隆起地があつてやはり古瓦が散じている。最近、重松景彦氏は偶然の機会に此處の地下約20cmの処において長径約70cm、短径約50cm、上面の削平された巨石を発見されている。その所在位置から考えれば、おそらく往昔の伽藍石であろうと思われるが、慎重を期する意味からそれの推定は今後の付近における発掘調査の結果に俟つて決することとしたい」と記されている(第23図参照)。

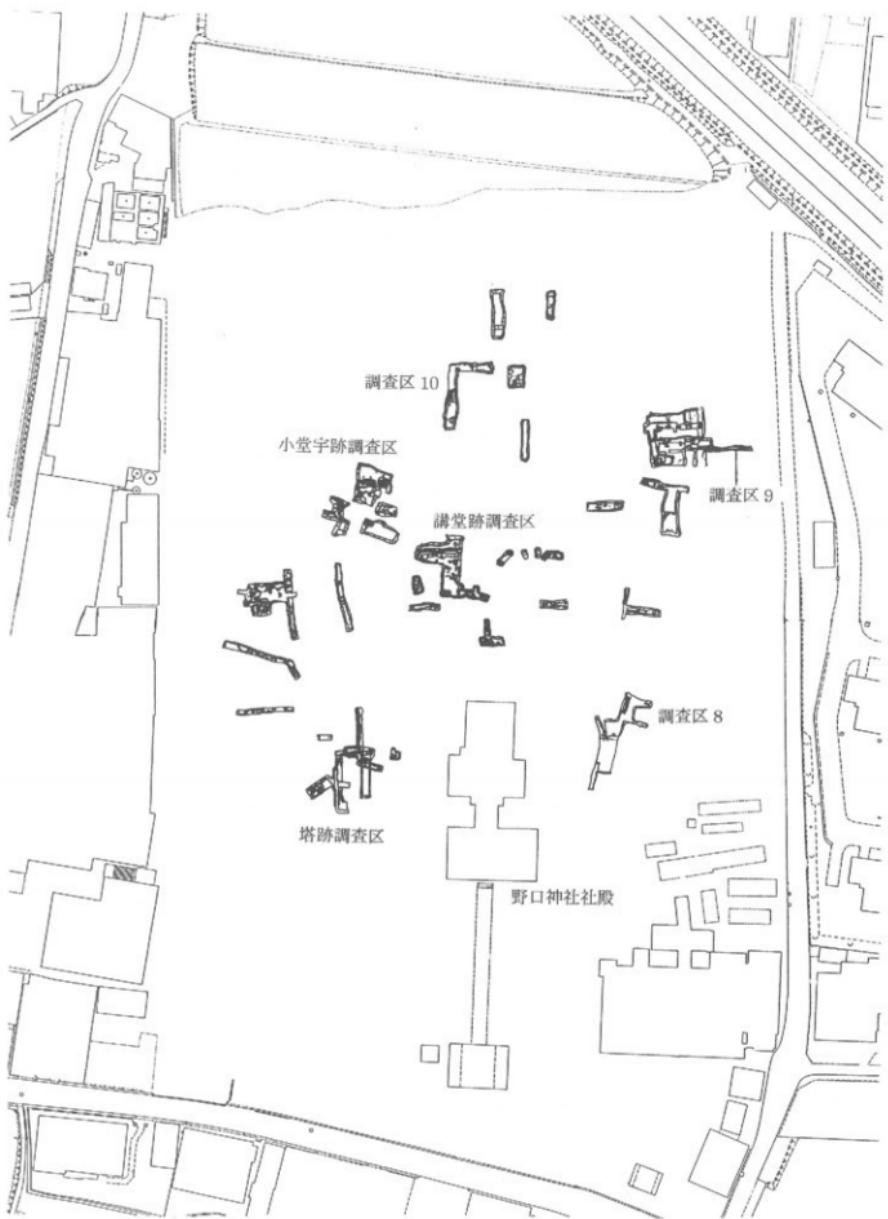
残念ながら、幣殿西側のA地付近では、地形の隆起はすでに無く、古瓦の夥しい破片も見られなかつた。しかし、本殿北側約25m程の位置に凝灰岩の礎石が露出しており、この地点が鎌谷氏の指摘するB地であることは間違ひなかつた。そのため、平成6年度調査においては、まず礎石の周辺から調査を開始し、調査区1を設定した。礎石は2石あり、北側の石を礎石1、南側の石を礎石2とする。礎石1は平面梢円形を呈し、長辺約75cm、短辺約65cmの大きさである。礎石2は平面隅丸長方形を呈し、長辺約90cm、短辺約70cmの大きさである。前述の『播磨上代寺院址の研究』に記載されている礎石は、大きさから考えると、礎石1であろう。



第3図 トレンチ配置図(平成6年)



第4図 トレンチ配置図(平成7年)



第5図 トレンチ配置図(平成6・7年)

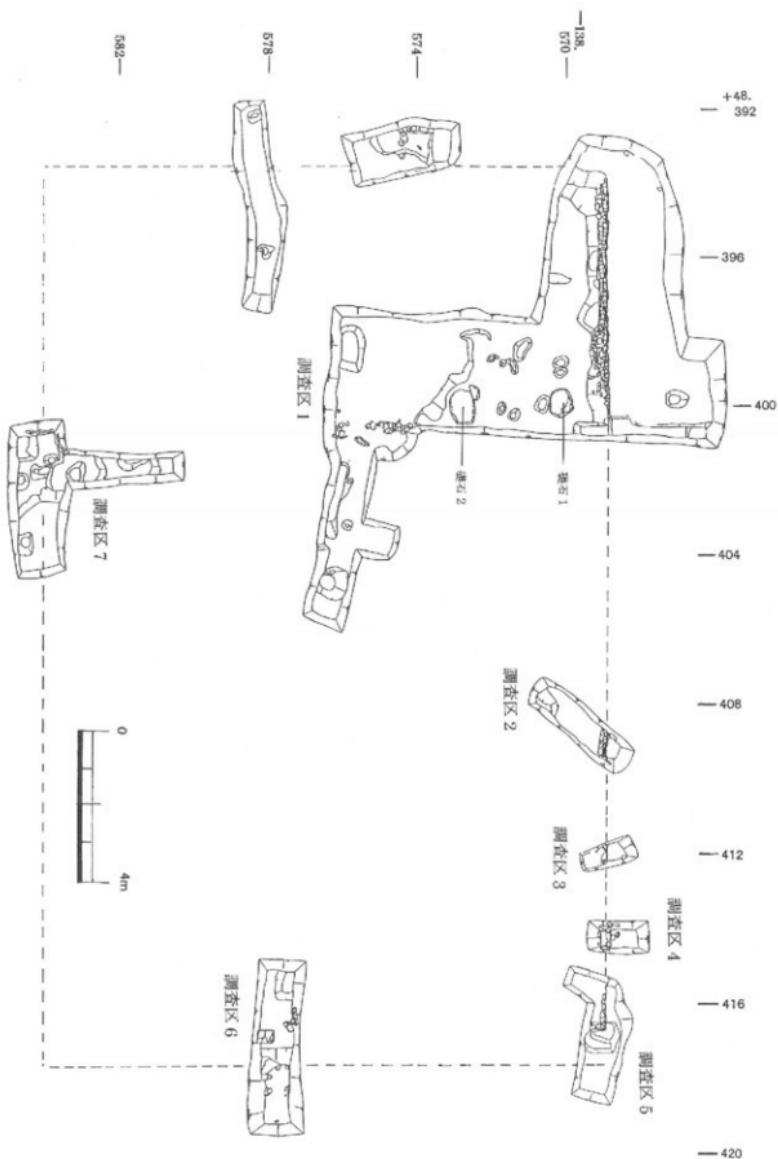
調査区内の掘削を開始すると、礎石1の北1.2mから基壇外装の瓦積が検出され、基壇の北辺が確認された。瓦積は、検出長約6.8m、最高10段、高さ約40mまで残されていた。地覆石ではなく、直接地面から瓦を積み上げていた。また、基壇上面の瓦積はすでに失われていた。瓦積は東側では比較的丁寧であるが、西側は非常に乱雑となる。瓦は、平瓦を縦に割り、凸面を上にして積み重ねていたが、平瓦を4分の1程度に割った瓦やさらに小さく割った瓦も多数使用されていた。割った面や小口を外側に向ける瓦も多数見られた。また、完形の丸瓦や割った丸瓦も多数使用されていた。瓦を仔細に観察すると、放射状叩きを施す瓦や凸面の叩き目を丁寧にすり消す瓦の他、斜格子叩きを施す瓦なども見られ、新旧の各瓦が混在しており、補修を受けた瓦積基壇と考えられる。基壇高は約52cmである。雨落溝は、明確に検出されなかった。

また、基壇北辺の規模を確認するため、調査区2、3、4、5を設定して調査を行った。その結果、調査区5において基壇北東隅を確認した。しかし、東辺側は、すでに破壊されており、正確な隅は検出できなかった。東辺を検出するために、さらに調査区6を設定したが、すでに外装は無くなってしまっており、基壇の高まりを検出したのみである。基壇上に長辺約40cm、短辺約40cmの方形の礎石一個を検出した。その性格は特定できないが、これは、礎石1、2に比べると小振りで、時期の異なる建物の礎石か、補助的な柱の礎石と思われる。また、西、南の各辺を検出するため、それぞれトレンチを設定したが、いずれも瓦積は残っておらず、北辺の残りが最も良いことが確認された。基壇南辺を確認するため、調査区7を設定した。しかし、基壇はすでに大きく削られており、瓦積は残されていなかった。検出された土壇の高さは、最も高いところで約40cmであった。南端部のレベルは、15.47mで、これは北辺瓦積基壇下のレベルとほぼ同じである。そのため、残存する高まりの端を基壇南端部と推定した。

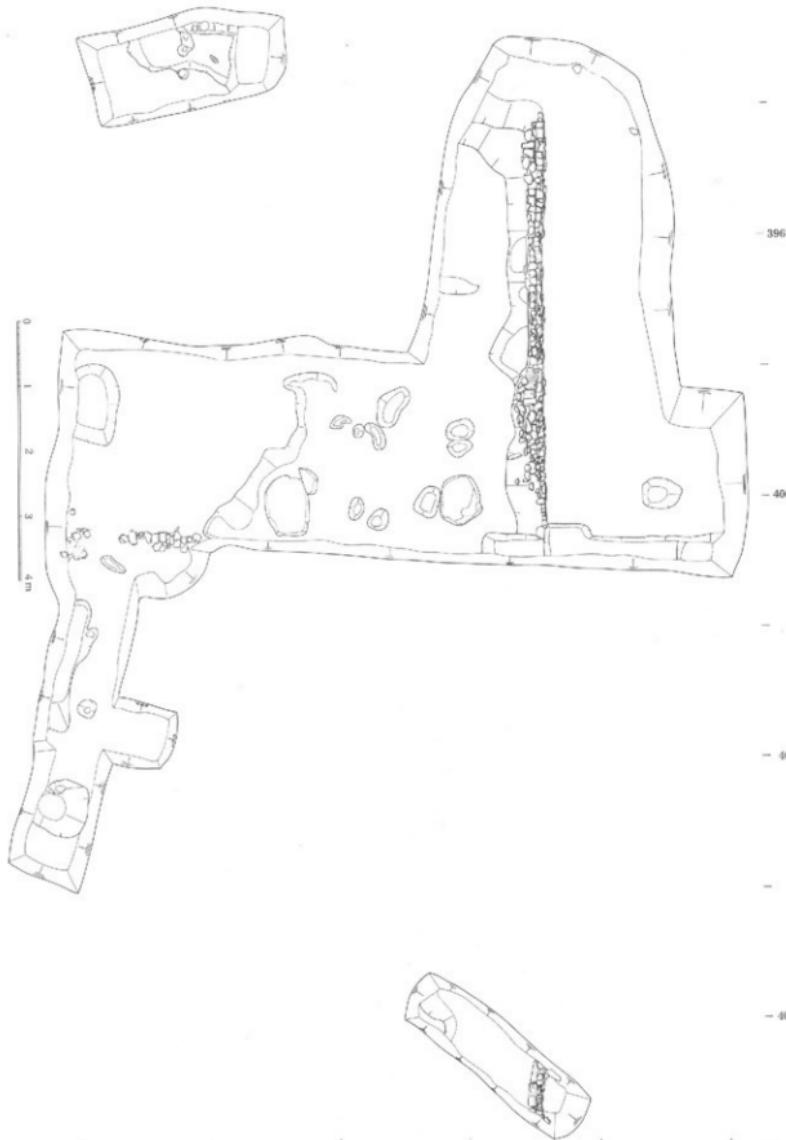
検出された基壇は、東西約24m×南北約15mの規模である。礎石1と礎石2の距離は約2.7mである。検出された基壇を西条庵寺の講堂跡と比較すると、東西26.3m、南北15.6mの規模で、最も近い。よって、講堂跡基壇であると考えられる。

## 2. 小堂宇跡

講堂跡の北西約16mの地点にも、長方形に高まる基壇状隆起が存在した。そのため、ここに調査区を4ヶ所設定して調査を行った。その結果、この場所からも瓦積基壇が検出された。検出された基壇は、東西約8.2m、南北約6.6m、高さ約40cmの規模である。基壇東辺は破壊されていたが、北、西、南の各辺では全て瓦積が検出された。最も残りが良かったのは、ここでも北辺であった。北辺基壇下には、多数の瓦片や土器片が積み重なって堆積し、瓦溜まりを形成していた。上器片には細片が多かった。北辺の瓦積は最高8~9段程度残されていた。地覆石は無く、直接地面から瓦を積んでいた。瓦積は、おもに平瓦を縦に割り、凸面を上にして積んでいた。しかし、ここでも平瓦の小破片や丸瓦を多く含み、軒丸瓦の破片までもが使用されていた。西辺の瓦積は、基壇底面から

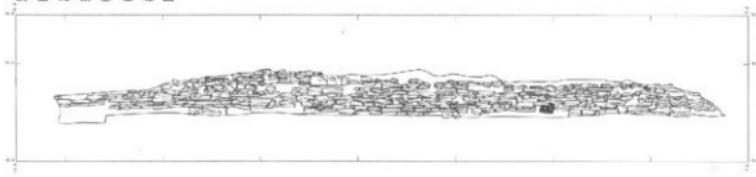


第6図 講堂跡調査区平面図

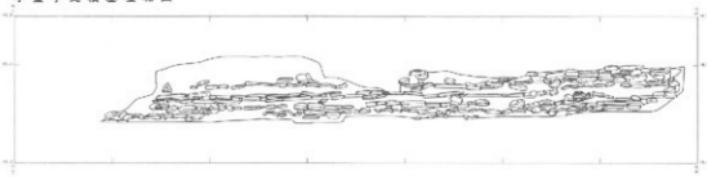


第7図 講堂跡基壇北面平面図

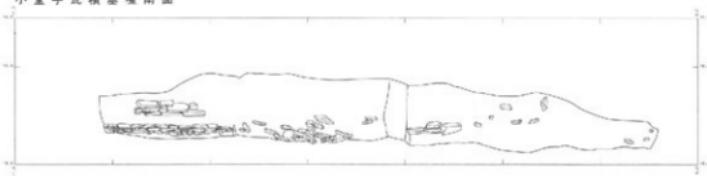
講堂瓦積基壇北面



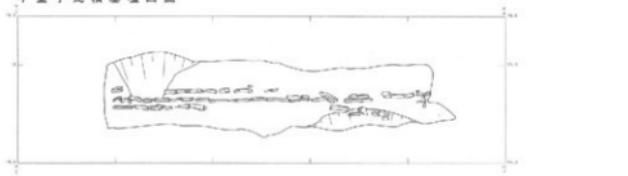
小堂宇瓦積基壇北面



小堂宇瓦積基壇南面



小堂宇瓦積基壇西面



第8図 講堂跡・小堂宇跡瓦積基壇実測図

約25cmまでの瓦積が、3段程度残されていた。しかし、一段ごとに隙間が生じており、その部分は土のみであった。また、南辺からも、基壇下部において、数段の瓦積が検出された。全体的に、使用されている瓦は、放射状叩きを施すタイプから、斜格子叩きを施すタイプまで、各種類が混在していた。積み方は講堂よりもさらに乱雑で、瓦積の間には、多くの隙間が生じていた。

基壇上面からは、礎石の抜き取り痕跡が2ヶ所検出された。西側に位置する抜き跡1は、いびつな円形で、部分的な検出であるが、検出最大長は約1.4m、深さは約24cmである。東側に位置する抜き跡2は梢円形で、長径約90cm、短径約70cm、深さ約24cmである。抜き跡1、2間の距離は約2mである。抜き跡1から基壇北辺までの距離は約1.5mである。これらのことから建物規模を復元すると、桁行3間、梁間2間の東西方向に長い建物であったと考えられる。

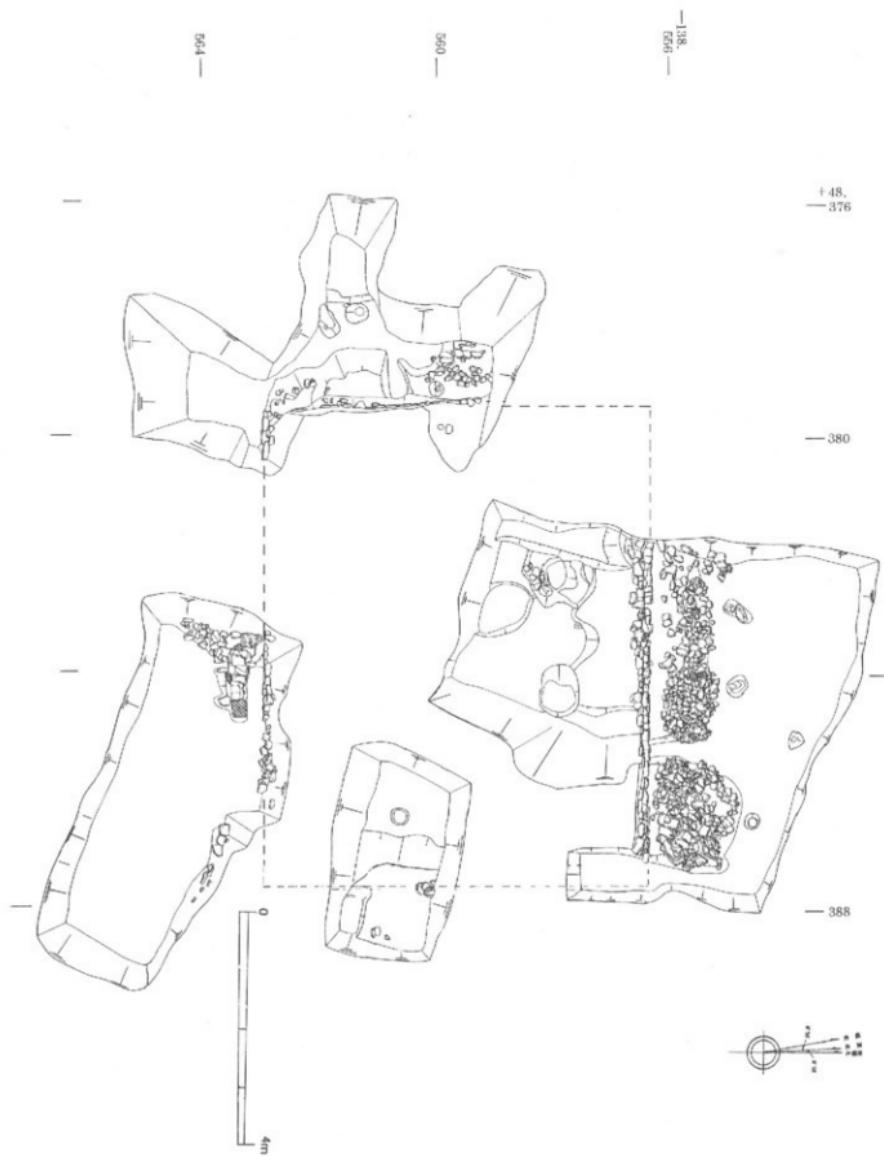
この建物跡は、瓦積基壇を有するが、3間×2間と規模が小さく、講堂の北西側に位置することから、経蔵などの附属施設と考えられる。

### 3. 土壘状遺構

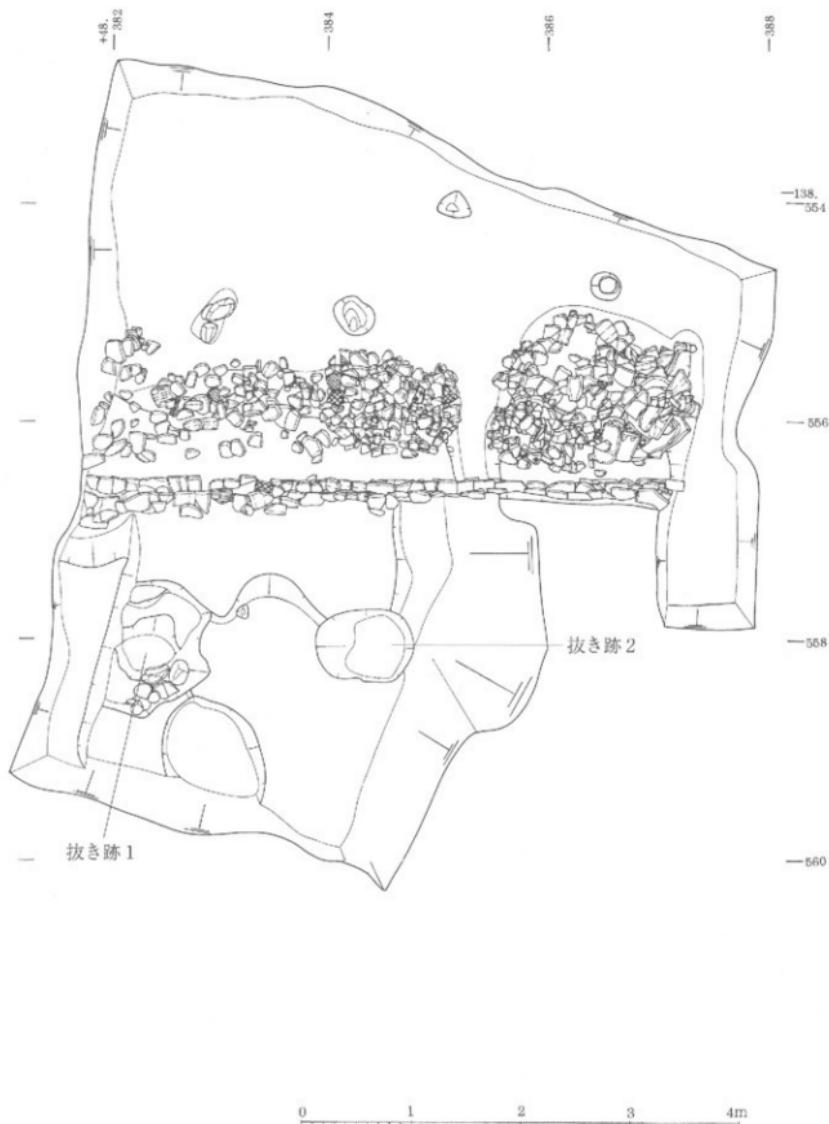
現況地形を観察すると、講堂跡の西側から幅約3~4m、高さ約40~50cmほどの土壘状隆起が東西方向に向かって約30m直線的に伸びていることがわかった。この場所は、回廊の存在が想定される場所であり、この土壘状の高まりが、回廊に相当する施設の痕跡ではないかと思われた。この隆起は、講堂の西約30mの地点で南に向かってL字状に折れ曲がっているが、その数メートル先で、削平のためか消滅していた。この土壘状隆起を調査するため、北西隅に相当する位置に、およそ10m×6m程度の調査区を設定した(第13図)。その結果、調査区1から幅約3m、高さ約30~40cmほどの、L字状に折れ曲がる高まりを検出した。また、遺構の周囲から、鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦と忍冬唐草文軒平瓦が、数点転落したような状況で検出された。しかし、礎石やその抜き取り痕跡、あるいは柱穴などは検出されず、基壇の外装やその痕跡も確認できなかった。調査区3では、地面の高まりはすでに無くなっていたが、幅約2.8mの平坦面があり、その西側に幅約1.6m、深さ約50cmの溝が検出された。また、東側には、幅約1m、深さ約70cmの溝が検出された。調査区4では、幅約1.6mの平坦地が検出され、その西側に幅約1.5m、深さ約30cmの溝が検出され、東側には、幅約80cm、深さ約20cmの溝が検出された。調査時において、土質の差異が少なく、遺構面の把握はかなり困難であり、遺構の構造を明確に把握する事はできなかった。

### 4. 塔 跡

平成7年度の調査によって検出された建物跡である。調査場所は、鎌谷木三次氏が『播磨上代寺院址の研究』で指摘していた「A地」に相当する場所である。鎌谷氏の記述によると「A地付近では、小規模ながら地形が一段と高くなり、雜木の根元には現に夥



第9図 小堂宇跡調査区平面図



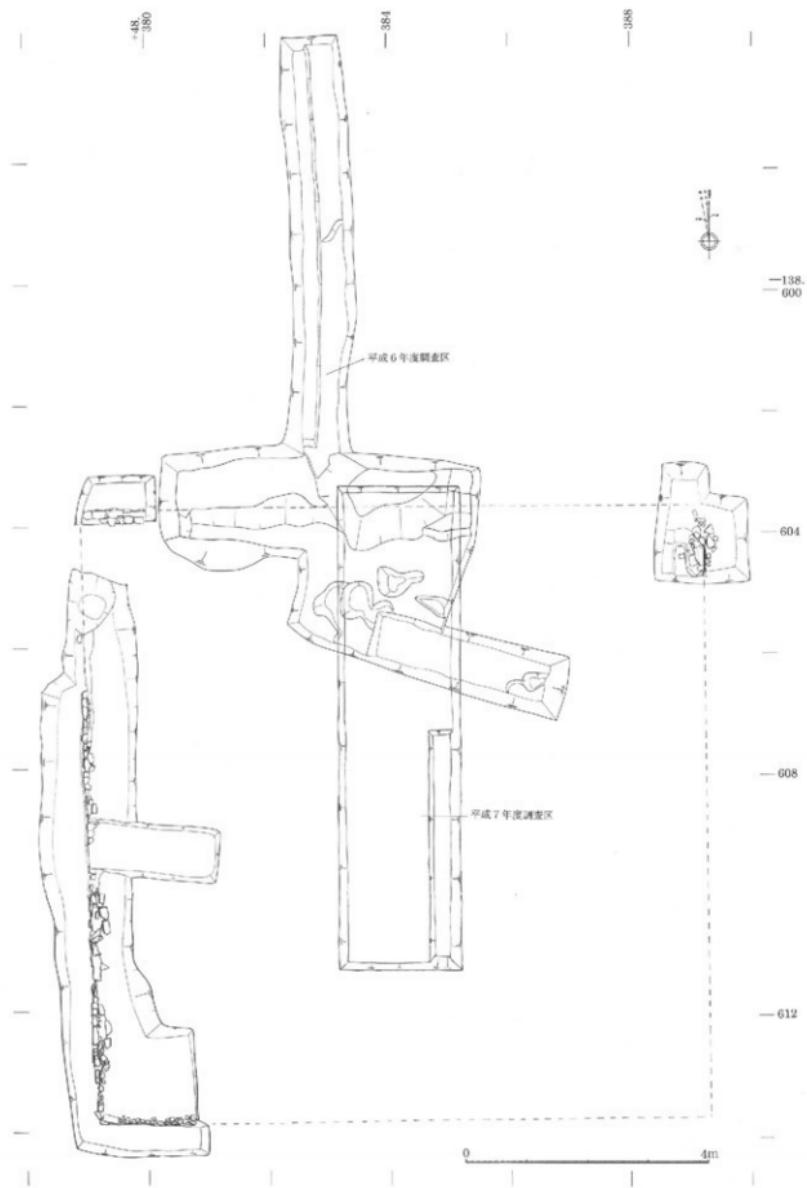
第10図 小堂宇跡基壇北面平面図

しい古瓦破片の潜んでいる」状況が確認されていた。前述のように「A地」の隆起は、すでに削平されて無くなってしまい、平坦に地ならしがされていた。また、古瓦破片の散布も、特に見られなかった。しかし、掘削を開始すると、地表からわずか1~10cm程度下から、瓦積基壇が検出された。瓦積は部分的であるが、四辺すべてに残されていた。最も残りの良かった南側では、最高12段、高さ約30cmが遺存していた。ついで、西辺がよく残されていた。最高7段程度、高さ約30cm程度まで残されていた。東辺は、基壇北東隅に設定した調査区で確認した。北辺には、長径約2cm程で、平面形状がゆがんだ梢円形を呈する攪乱孔があり、基壇が大きく破壊されていた。そのため、瓦積はほとんど遺存していなかった。北西隅の調査区で瓦積が、かろうじて残されていたのみである。瓦積は地覆石を置かず、地面から積み上げていた。このことは、野口廃寺で検出されたすべての瓦積基壇に共通する。基壇の構築は、地山を約70cm掘りこんで、積土をして地業を行っていた。瓦積は、亂雑に積み重ねられていた。主に、縦に割った平瓦の凸面を上にして積み重ねていた。しかし、中には丸瓦や平瓦の小片もかなり使用されていた。また、破碎した面を外側に向いている瓦も多数見られた。瓦を仔細に観察すると、放射状叩きを施した古いタイプの他、斜格子叩きを施したタイプも多数混入していた。

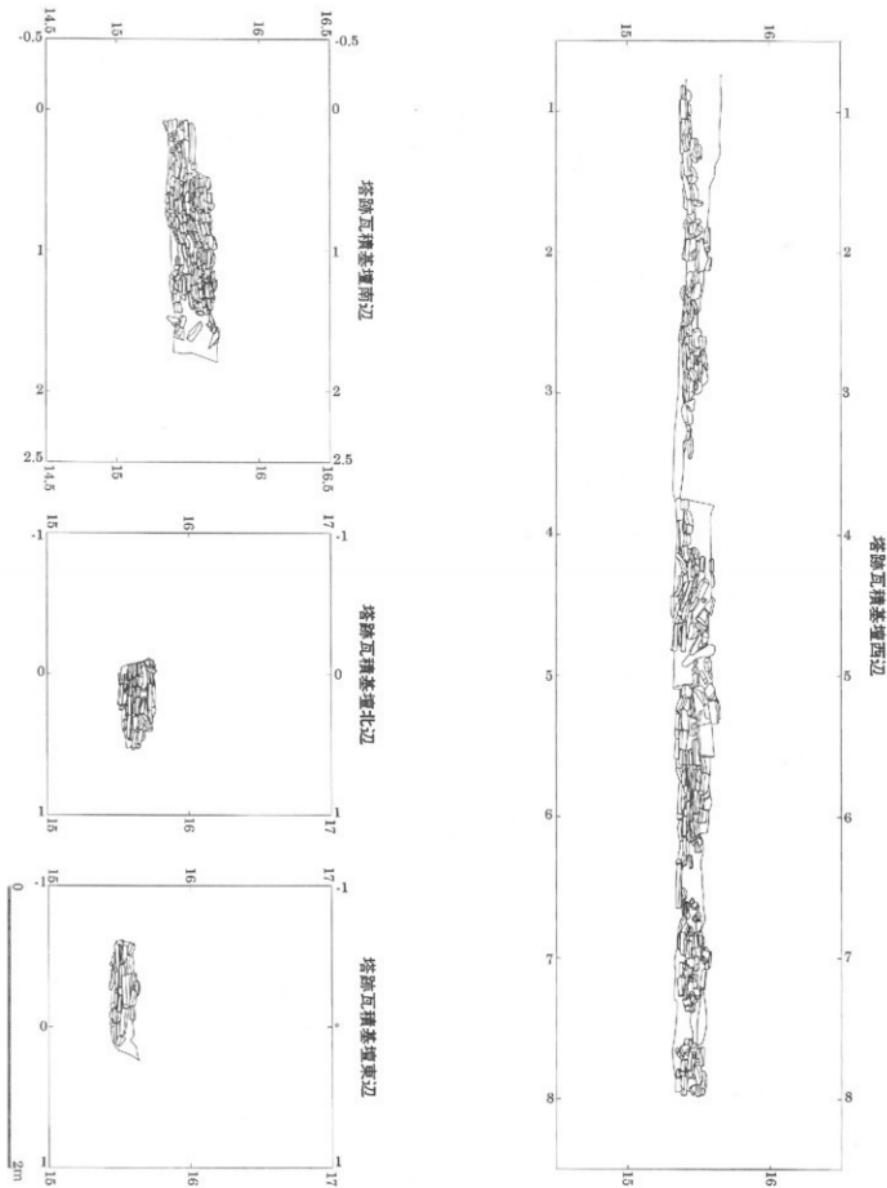
基壇の規模は、約10.2mの方形である。残存高は約30cmである。基壇中央部を調査したが、すでに削平を受けていたため、心礎や抜き跡などは検出されなかった。そのため、建物跡の規模を復元することはできない。西条廃寺の各遺構と比較すると、塔基壇が一辺約11mの規模であり、この基壇に最も近い。位置的にも講堂跡の南西に位置することから塔跡と考えられる。

## 5. 北東建物跡

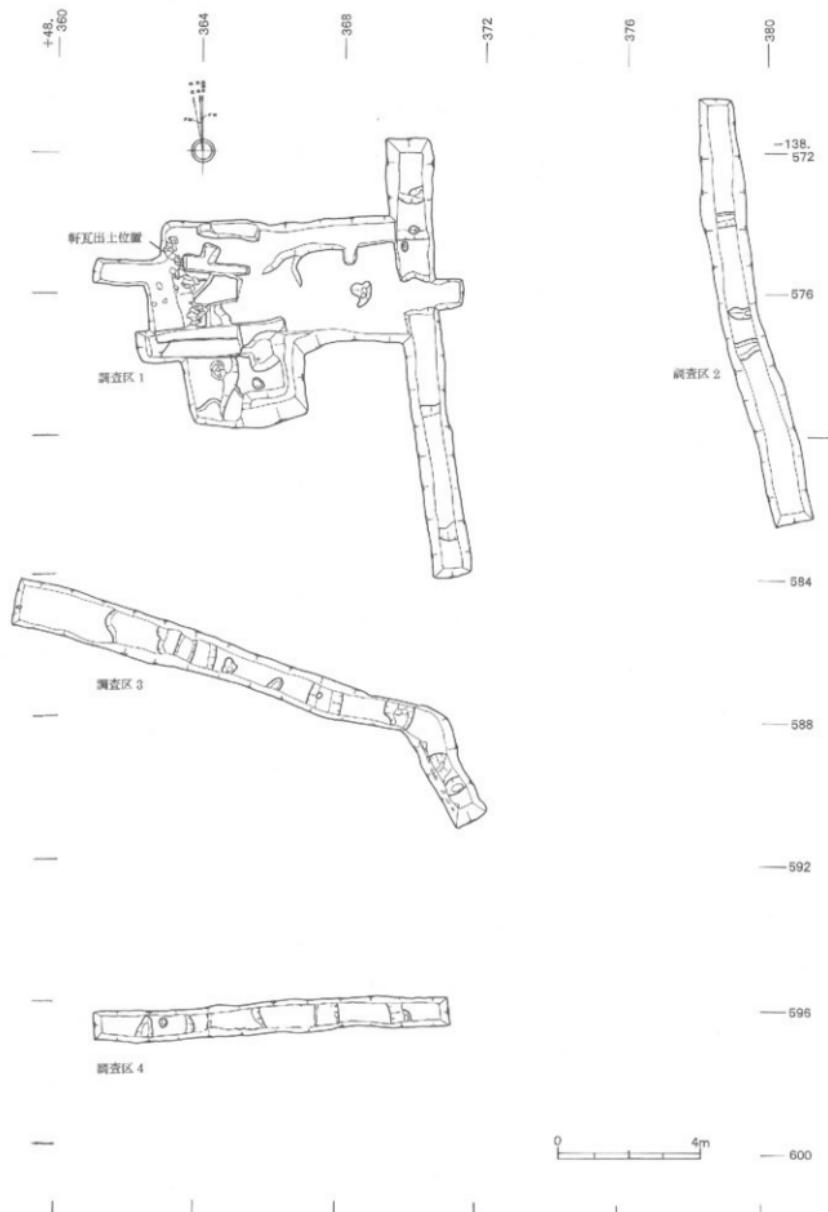
平成7年度調査によって、検出された建物跡である。講堂跡の北東約30mの位置にある。検出された建物は、下層の掘立柱建物と上層の礎石建物である。この場所に、わずかな隆起地形が存在したため、調査区を設定して調査を行った。下層の掘立柱建物跡は、東西約7m×南北約6m、桁行4間×梁行3間の規模で、純柱である。北辺の東から2個目の掘方内(第14図、柱穴1)から「北宿式軒平瓦」1点(第18図26)が出土した。建物は地山である赤褐色粘土を掘りこんで、構築していた。北側の掘方は、確認が容易であったが、南側は色調の違いがわずかで、うまく検出できない箇所もあった。この建物が廃絶した後、この上に、約20cm程度の盛土をして、礎石建物を構築していた。礎石は2石あり、北側を礎石1、南側を礎石2とする。礎石1は、横に長い5角形で、約70cm×約50cmの大きさである。礎石2は、三角形で、約60cm×約55cmの大きさである。礎石の下には、根石とともに、野口廃寺に使用されている瓦片を多く埋ませており、盛土内にも、布目瓦の細片を多く含んでいた。また、礎石の抜き取り痕跡の可能性がある石片が散乱する箇所が3ヶ所検出された。盛土中にも遺物が混入するため、礎石の抜き取り痕跡の輪郭を確認することが困難であった。下層建物の廃絶後に、盛土をして礎石建物を



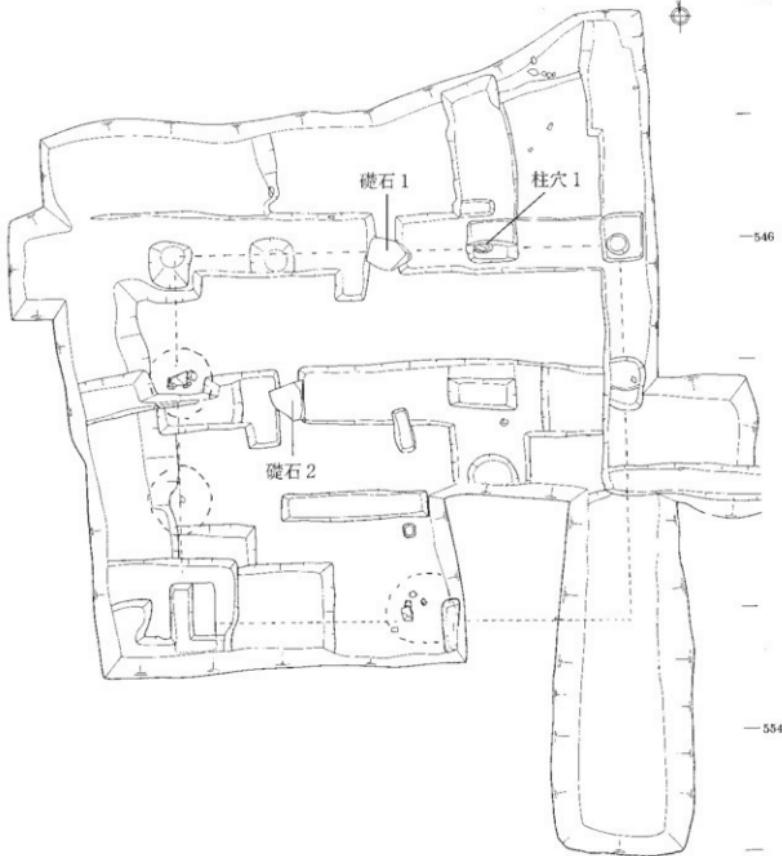
第11図 塔跡調査区平面図



第12図 塔跡瓦積基壇実測図



第13図 土壘状遺構調査区配置図



第14図 北東建物跡調査区平面図

建てたと思われる。しかし、東側2間分については、盛土、礎石ともに検出されなかつた。そのため、上層の礎石建物は、下層の掘立柱建物より規模を縮小して、建てたものと思われる。周囲からの瓦片の出土は少量で、瓦葺建物ではなかったと考えられる。建物は、東西2間×南北3間の規模と推測される。

#### 6. その他の調査区(第5図)

その他の調査区では、いずれも明確な遺構を検出していない。調査区8は、野口神社本殿東側に設定した調査区である。調査時の事情から、これ以上西側に設定する事ができなかつた。調査区は、方形に設定できていないが、南北約14m×東西約3m程度の規模である。金堂跡ないしは、東塔跡などが検出される可能性を考えたが、掘削を行つた結果、遺構はまったく検出されなかつた。地山は調査区、西側から東側に数cm程度、緩やかに低く傾斜しており、野口神社本殿に近づくほど地形が高くなつてゐた。この調査区堆土中から、素文縁複弁八葉軒丸瓦の破片1点が検出された。

調査区9では、寺城を確認するために、調査区を野口神社境内周囲の土壘に設定して、東、西の調査を行つた。東側は、北東建物跡調査区から、東側にサブトレーンチを延ばして調査した。これを調査区9とする。土壘には、黄褐色砂質土、淡黄色砂質土が堆積していたが、いずれも縮まりが無く、野口廃寺に使用されていた布目瓦片が多く含んでいた。そのため、この土壘が、野口廃寺当時からのものであると判断することはできなかつた。

調査区10は、講堂の背後に僧坊などが建てられているかどうかを確認するために設定した。L字型の調査区である。しかし、建物跡は検出されなかつた。この調査区からは、9世紀中頃の土器が数点出土した(第21図43、45、46、47)。

### 第3節 遺 物

出土遺物は、瓦、土器である。瓦は、軒丸瓦2種類、軒平瓦6種類、丸瓦、平瓦、鷹尾がある。40点を図示した。土器には、須恵器、土師器がある。

#### 1. 瓦

##### (1) 軒 丸 瓦

###### NM1類

1は鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。全体に摩滅している。焼成は軟質である。講堂跡北側調査区より出土した。周縁は三角縁で、鋸歯文を配する。中房に1+8の蓮子を配し、周間に2重の圈線を巡らせてゐる。野口廃寺において、最も多く出土した軒瓦である。

2は小堂宇跡北側調査区から出土した。灰色を呈し、須恵質である。全体的に摩滅している。

+48  
— 424

— 428

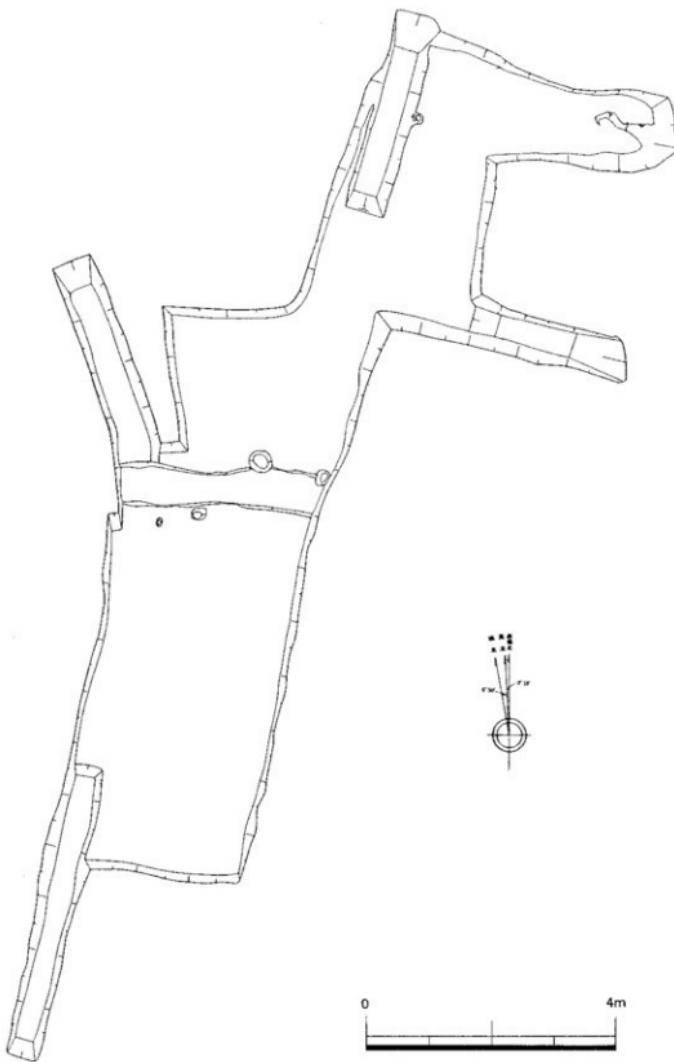
— 432

— 138  
— 596

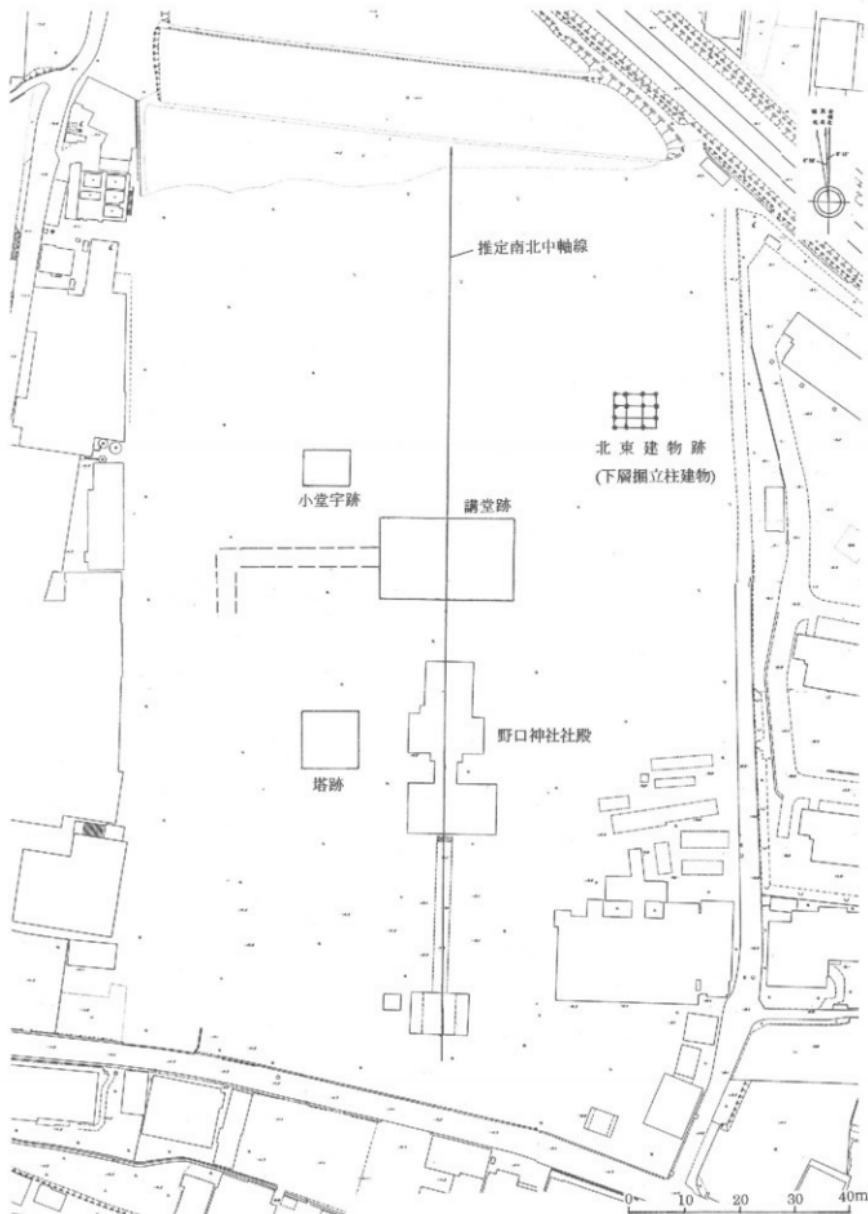
— 600

— 604

— 608



第15図 調査区 8 平面図



第16図 全体遺構配置図

3は講堂跡北側調査区から出土した。灰白色を呈し、やや軟質である。瓦当面が摩滅している。丸瓦部を接合するため、瓦当部裏面上部に半円弧状の段を作っている。

4は小堂宇跡北側調査区より出土した。須恵質で、青灰色を呈する。丸瓦部凸面は、ヘラ削りをする。四面の接合部補充粘土は、荒くなつてつけている。

5は黒褐色を呈し、堅く焼き締まる。講堂跡北側調査区より出土した。瓦当部裏面の丸瓦接合部の補充粘土は、荒くなつてつけられている。

7は小堂宇跡北側調査区から出土した。須恵質を呈し、焼成は堅緻である。

8は小堂宇跡北側調査区から出土した。胎土に白色砂を多く含む。瓦当部裏面の粘土接合状況がよく観察できる資料である。

9は講堂跡調査区埋土から出土した。須恵質で、堅く焼き締まっている。瓦当部裏面上部に、丸瓦部を接合するための段を作っている。接合部には粘土が補充されている。凹面は、荒くなつてつけられている。丸瓦部凸面は、ヘラ削りが施されている。

10は塔跡西側調査区埋土中から出土した。中房の一部が剥離している。全体的に摩滅している。

11は講堂跡調査区から出土した。瓦当面の上下を大きく欠いている。瓦当部裏面には丸瓦部を接合するための半円弧状の段を作っている。接合される丸瓦の厚みは2.2cmである。その上下に接合用の補充粘土があつてられている。

12は講堂跡北側調査区から出土した。須恵質を呈し、堅く焼き締まる。

13は小堂宇跡北側調査区から出土した。焼成は堅緻である。

14は小堂宇跡北側調査区から出土した。須恵質を呈する。

#### N M 2 類

15は塔跡埋土中より、出土した。素文縁で、周縁に沿つて、2条の突線を巡らせる。蓮弁はない。中房の蓮子は1+6である。

#### (2) 軒平瓦

##### N H 1 類

16は土壘状構造調査区1から検出された高まりの北西隅下から出土した。忍冬唐草文軒平瓦である。灰白色を呈し、緻密な胎土である。凹面に布目圧痕が残る。凸面は、叩き目を丁寧になでによつてすり消している。側面はへら削りする。桶巻き作りによつて、製作された瓦である。瓦当面は、硬化した忍冬唐草文である。2重檐円形の中心飾りから直線的に伸びる茎が表現され、さらに、下方に折れ曲がつて伸びる茎が表現される。

17は忍冬唐草文軒平瓦である。16と同じ場所から出土した。灰白色を呈し、緻密な胎土である。瓦当面中央部を大きく欠失している。凹面に布目圧痕、糸切り痕を残す。凸面は、叩き目を丁寧にすり消している。桶巻き作りによつて、製作された瓦である。

18は忍冬唐草文軒平瓦である。これも17と同じ位置から出土した。灰白色を呈し、緻密な胎土である。凹面に布目圧痕、桶枠板圧痕が残る。凸面は、叩き目を丁寧になでによつてすり消している。側面はへら削りする。桶巻き作りによつて、製作された瓦であ

る。瓦当面は、硬化した忍冬唐草文である。2重檐円形の中心飾りから直線的に伸びる茎が表現され、さらに、下方に折れ曲がって伸びる茎が表現される。

19は講堂跡調査区埋土から出土した。忍冬唐草文軒平瓦である。凸面は叩き目を丁寧なまでよってすり消している。瓦当面の唐草文は、文様が2重になっている。瓦当面に2回粘土を押し当てている。そのため、右に9mm程度文様がずれて重なっている。

#### N H 2類

21は小堂宇跡北側調査区から出土した。瓦当面にへら描で斜格子文を刻んでいる。焼成は土師質で、赤橙色を呈する。胎土には白色土と赤褐色土を多く含む。

22はへら描斜格子文軒平瓦である。講堂跡調査区から出土した。土師質で、橙色を呈する。胎土に白色土と赤褐色土を含む。凹面は、摩滅しているが、わずかに布目圧痕が残る。凸面は、長手の叩き板で、連続的に叩いている。

23はへら描斜格子文軒平瓦である。講堂跡調査区1堆土中より出土した。胎土に白色土、赤色土を含む。凹面に布目圧痕、糸切り痕が残る。凸面は、長手の叩き板により、連続的に叩きを施している。斜格子叩き目が残る。

24はへら描斜格子文軒平瓦である。講堂跡北側調査区から出土した。焼成は土師質で、凹面に布目圧痕、糸切り痕が残る。凸面は長手の叩き板で、連続的に叩いている。胎土には、白色土、褐色土を含む。

#### N H 3類

25はへら描唐草文軒平瓦である。講堂跡調査区7堆土より出土した。唐草は稚拙な表現である。焼成は土師質で、橙色を呈する。凹面には、布目圧痕が残る。凸面には長手の叩き板で、連続的に叩きを施している。斜格子叩き目が残る。

#### N H 4類

26は均整唐草文軒平瓦である。外区に珠文帯を配する。中心飾は上向きのC字形中心葉の中に垂飾を置いている。垂飾は花頭形で、内部に丈の短い十字形を配する。頸部は曲線頸である。「播磨国府系瓦」の「北宿式軒平瓦」である。北東延跡の掘立柱建物跡、掘方1から出土した。

27は均整唐草文軒平瓦である。24と同様に「播磨国府系瓦」の「北宿式軒平瓦」である。講堂跡北側調査区から出土した。

#### N H 5類

28は均整唐草文軒平瓦である。塔跡西側調査区から出土した。瓦当文様は、外区に珠文帯、内区に唐草文を配する。瓦当面右端近くに、直線的な範傷が残る。「播磨国府系瓦」の「長坂寺式軒平瓦」である。

#### N H 6類

29は均整唐草文軒平瓦である。塔跡調査区から出土した。曲線頸式で、瓦当面は、内区に唐草文を配するが、外区に珠文帯はない。焼成は堅緻で、須恵質である。割れた面を観察すると、頸部に粘土を接合した状況を観察できる。

### (3) 鶲 尾

30は鶲尾片である。塔跡西側調査区から出土した。縦帶および縫部を沈線で表現しており、「東播磨系鶲尾」である。出土破片は、全体的に弧を描いて曲がっている形状であることから、前部に近い位置の破片と考えられる。

### (4) 丸 瓦

#### M 1 類

31は行基葺式丸瓦である。講堂跡北側調査区から出土した。型によって成形し、2分割したものである。内面には布目圧痕および布の縫じ合わせ目が残る。外面は、縄目叩きをすり消している。

#### M 2 類

32は玉縁付式丸瓦である。型によって成形し、2分割したものである。内面の布目は、玉縁部と丸瓦部に連続して残る。内面に分割突帯の圧痕を残す。両側面をへら削りする。

### (5) 平 瓦

#### H 1 類

33は講堂跡北側調査区から出土した。凹面、布目圧痕、糸切り痕、枠板圧痕が残る。凸面は叩き目をなでにより、ていねいにすり消している。

34は講堂跡北側調査区から出土した。凹面は布目圧痕、糸切り痕、枠板圧痕、粘土板合わせ目の痕跡が残る。凸面は叩き目をなでにより、ていねいにすり消している。

#### H 2 類

35は講堂跡北側調査区から出土した。凹面に布目圧痕、枠板圧痕が残る。広端面はへら削りしているが、藁状圧痕が残る。側面に分割破面が残る。凸面は、広端部側から中ほどにかけて、放射状叩きを施し、その上から縦方向にハケ調製をしている。

36は小堂宇跡北側調査区から出土した。凸面は、広端部に近い側に放射状叩きを施している。その上から縦方向にかき目を施す。側面に分割破面が残る。凹面は布目圧痕、枠板圧痕が残る。

#### H 3 類

37は講堂跡調査区 7 から出土した。凹面には、布目圧痕が残る。狭端面にも、凹面から連続する布目が残る。広端面はへら削りしている。凸面は、指頭圧痕が多く残る。一枚作りによって、製作された瓦である。

38は講堂跡埋土から出土した。凹面に布目圧痕が残る。凸面は、全面に指頭圧痕を残す。広端面は、丁寧にへら削りしている。

#### H 4 類

39は講堂跡北側調査区から出土した。凹面に布目圧痕、糸切り痕が残る。凸面は、全体に斜格子叩き目が残る。胎土に白色土、黄色土を多く含む。

#### H 5 類

40は凸面に縄目叩きを施す。凹面に布目圧痕が残る。

## 2. 土 器

### (1) 須 惠 器

41から54は、須恵器である。55は、土師器である。41は、須恵器壺である。頸部は外反して立ち上がる。口縁部は外方に拡張され、上端部を上方につまみ上げる。小堂字跡北側調査区より出土した。

42は壺である。頸部は丸く外反し、口縁端部に面をもつ。体部外面に、右上がりの叩き目が残る。小堂字跡調査区より出土した。

43は壺B蓋である。口縁端部が屈曲する。端部を丸く収める。口径は18.2cmである。調査区10から出土した。

44は壺G蓋である。口径は、13.2cmである。内面にかえりをもつ。講堂跡調査区1より出土した。

45は椀である。口径15.7cm、器高5.5cmである。斜めに直線的に開く体部に、張り付け輪高台をもつ。底部はへら切り底である。内外面に火櫻が残る。調査区10から出土した。

46は壺L(稜椀)である。口径18.4cmである。高台を欠失している。体部と腰の境に明瞭な稜をもつ。体部外面上部は回転なで、下部は回転へら削りを施している。調査区10から出土した。

47は椀である。口径16cm、器高5.6cmである。斜めに湾曲ぎみに開く体部をもち、底部は張り付け輪高台である。体部外面に火櫻が残る。調査区10から出土した。

48は壺Aである。口径12.7cm、器高3cmである。体部内外面をなで調整する。火櫻が残る。小堂字跡北側調査区から出土した。

49は壺Aである。口径13.4cm、器高3.9cmである。体部は、直線的に開く。体部内外面に回転なでを施す。底部はへら切り不調整である。

50は台付皿である。口径14.4cm、器高2.9cmである。高台は、底部の周縁より、内側に付く。体部は直線的に開き、口縁端部がさらに外方に折れる。小堂字跡北側調査区から出土した。

51は壺底部である。底径10.4cmである。41と同種の壺の底部である。底部周縁にはへらおこしの痕跡が認められる。小堂字跡北側調査区から出土した。

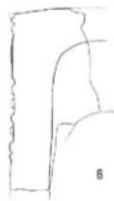
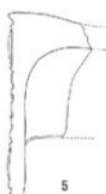
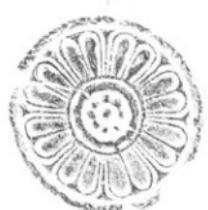
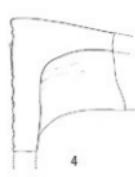
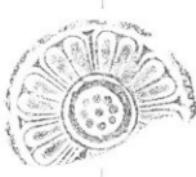
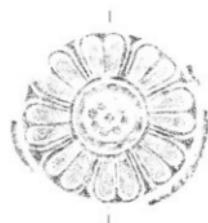
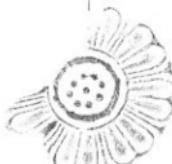
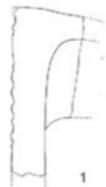
52は椀底部である。高い、ハの字に開く高台を付ける。底部は糸切り底である。胎土に、白色砂を多く含んでいる。小堂字跡北側調査区から出土した。

53は椀底部である。高い、ハの字に開く高台を付ける。底部はへら切り底である。内外面に火櫻が残る。小堂字跡北側調査区から出土した。

54は壺B底部である。輪高台を張り付けている。底部はへら切り底である。火櫻が全体に残る。小堂字跡北側調査区から出土した。

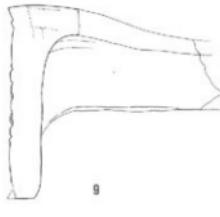
### (2) 土 師 器

55は皿などの底部と思われる。底面は回転糸切りである。色調は橙色を呈し、焼成は上質である。小堂字跡調査区から出土した。



0 20 cm

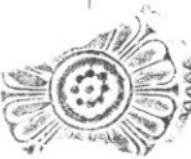
第17図 軒丸瓦実測図



9



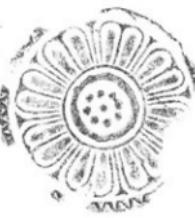
10



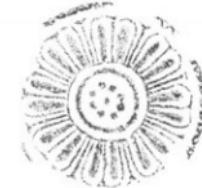
11



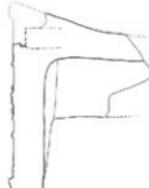
12



13



14



15





16



17



18



19



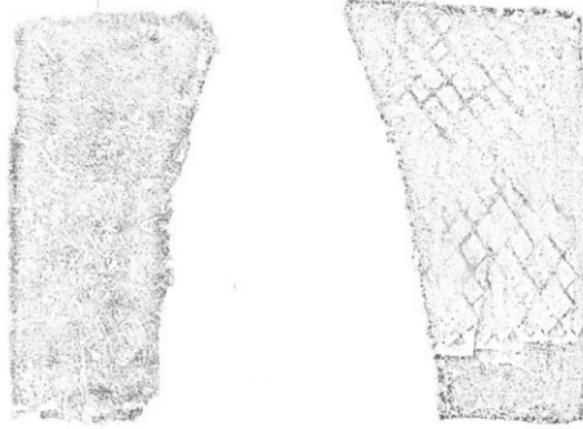
20



21



第18図 軒平瓦実測図

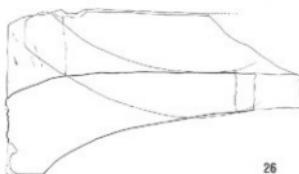




23



24



26



27



28

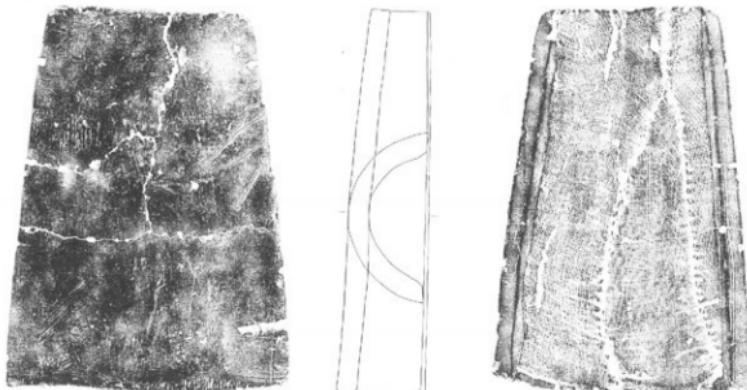


29

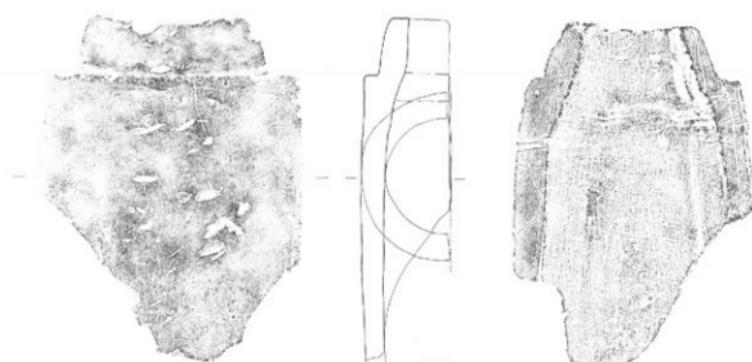


30





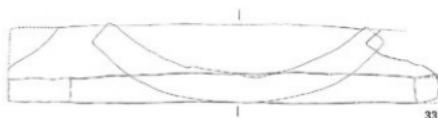
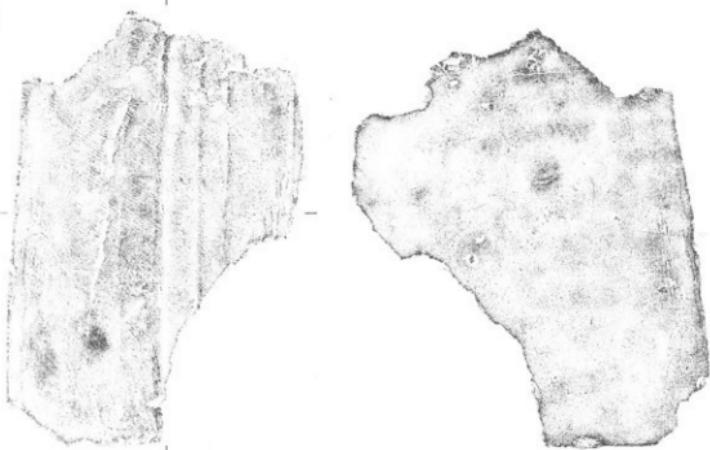
31



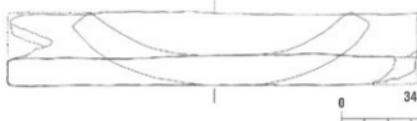
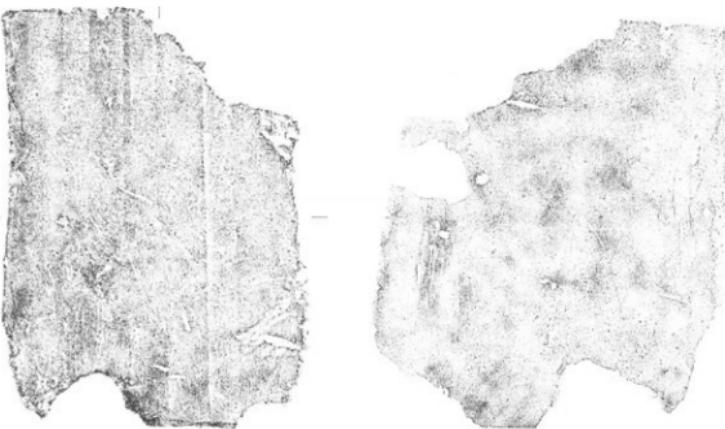
32



第19図 丸瓦実測図



33

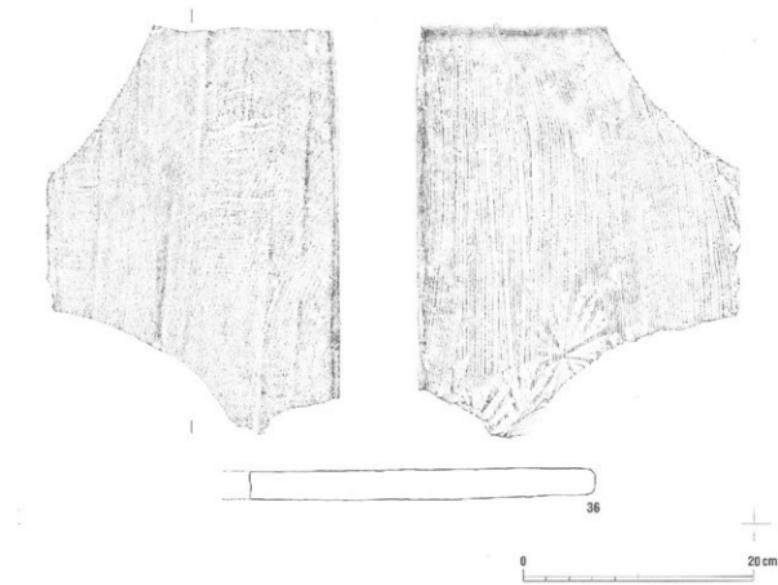
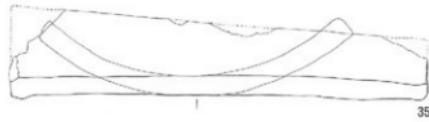
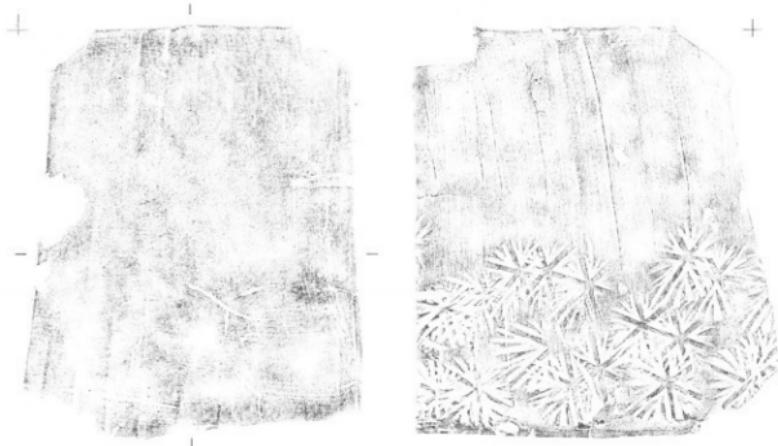


0

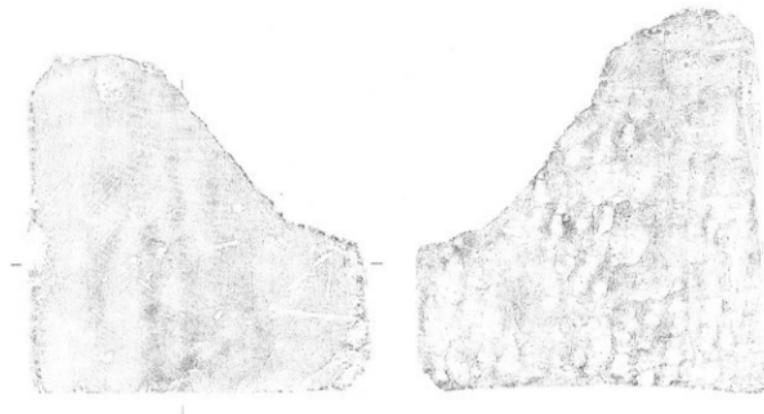
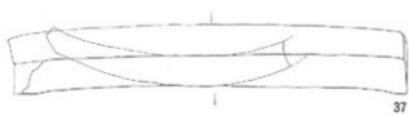
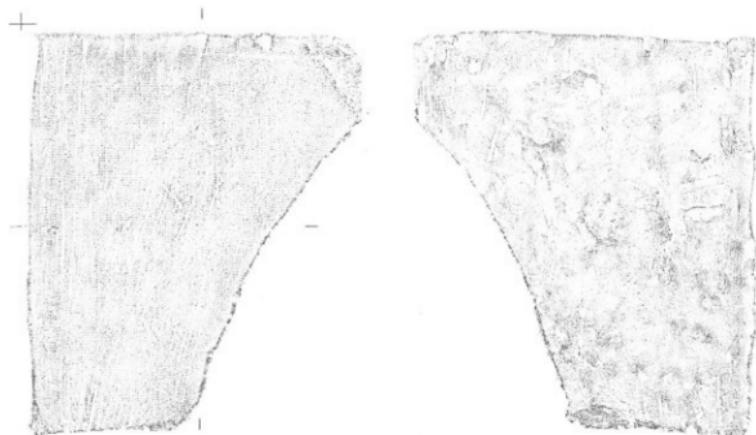
34

20 cm

第20図 平瓦実測図



0 20 cm



0 20 cm

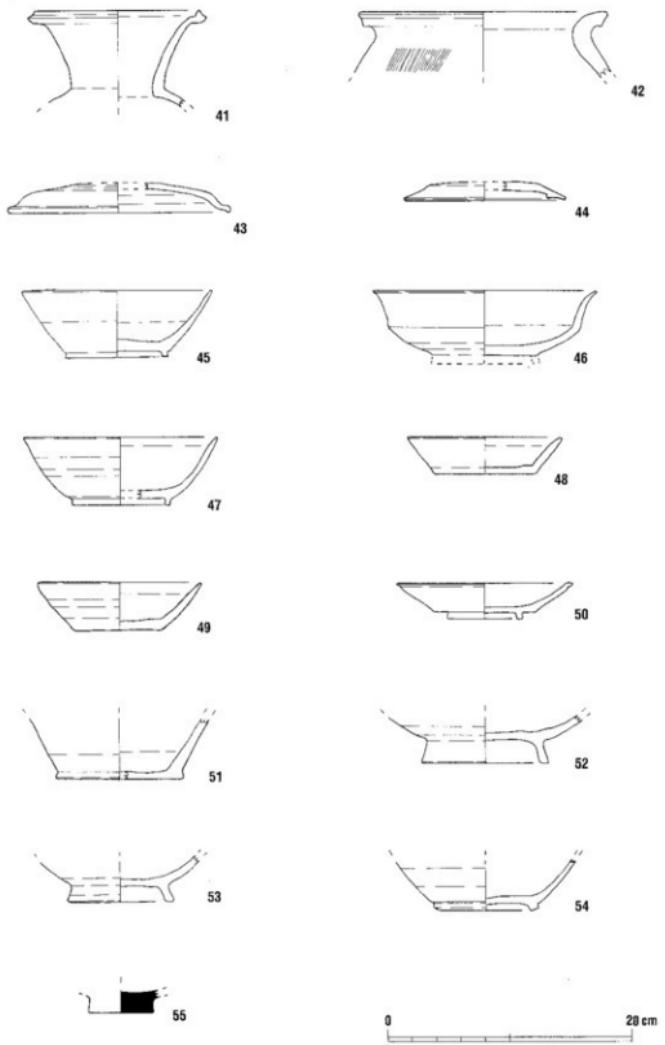


39



40





第21図 出土土器実測図

## 第3章 考察

### 1. 伽藍配置・寺域

2年にわたる調査によって、塔跡、講堂跡、小堂宇跡、掘立柱建物跡などを検出した。講堂跡の検出された基壇は、東西約24m×南北約15mの規模である。礎石は2石残されていた。礎石1と礎石2の距離は約2.7mである。基壇南北の規模は50尺と考えられ、建物梁行は、庇の1間が、礎石1と2の距離から約2.7mで9尺、礎石1から基壇北端までは約1.2mで4尺である。礎石2から調査区1の南端まで礎石や抜き跡は検出されていないことを考えると、身舎は1間が約3.6mと考えられ、梁行4間の庇付建物とすると基壇規模と整合する。桁行は、礎石や抜き跡が礎石1以外見つからず、基壇の東西端もすでに破壊されているため、正確な基壇規模、建物の復元はできない。

塔跡基壇は約10.2mの正方形である。残存高は約30cmである。基壇中央部を調査したが、すでに削平を受けていたため、心礎や抜き跡などは検出されなかつた。瓦積は南辺が最も残りがよく、最高12段残されていた。

講堂跡の北西約16mの位置からは、附属建物の基壇が検出された。検出された基壇は、東西約8.2m、南北約6.6m、高さ約40cmの規模である。基壇の外装は瓦積で、東辺を除く各辺で検出された。礎石の抜き跡が2ヶ所検出された。抜き跡1、2間の距離は約2mである。抜き跡1から基壇北辺までの距離は約1.5mである。このことから建物規模を復元すると、東西は3間、南北は2間の建物と考えられる。基壇は南北約6.6mで、22尺の規模である。建物の梁行は1間6尺とすると、2間、12尺で、基壇端までは約1.5mあり、5尺と考えられる。この建物跡は、瓦積基壇を有するが、3間×2間と規模が小さく、講堂の北西側に位置することから、経蔵などの附属施設と考えられる。

金堂跡は未検出である。現在、野口神社の社殿が、講堂跡の南側、塔跡の東側に建てられており、社殿の下は、遺憾ながら調査を行っていない。一方、本殿東側の調査区8においては遺構は検出されず、遺物もわずかであった。このことから、本殿下近辺に、金堂跡が存在する可能性が最も高いと考えられる。

寺域については、野口神社の境内が、長方形を呈し、東西が約109mあることが、鎌谷木三次氏(註1)や井内功氏・井内潔氏(註2)らに注目されていた。野口神社の東西には、幅約2~3mの溝が巡り、その内側に土塁が巡っている。土塁については、断ち割って調査し、黄色土を積んでいる状況を確認したが、土層には縮まりがなく、布目瓦破片を多く含んでおり、これが、当初から野口庵寺にともなっていたものかどうか判断することができなかった。しかし、今回の調査で、講堂跡が検出された事により、講堂基壇の南北中軸線が野口神社境内地の南北中軸線とほぼ重なっていることが確認された(第16図)。野口神社は、縁起によれば、江戸時代に建てられた神社である。このことから推測すると、東西の寺域は野口庵寺廃絶後もその痕跡が残されており、それを再利用する

形で、江戸時代に野口神社社殿の中軸線を設定したのではないかと思われる。そのため、古代寺院の中軸線と近世の神社の中軸線が大体同じ位置にあるのであろう。このことから、東西の寺域は、光学的想定のとおり1町と考えてよいと思われる。南北方向の寺域については、今回の調査では、現社殿の南側が、調査できなかつたことなどもあり、十分な確認はできなかつた。現在の野口神社境内は南北方向が約145mあり、これが当初の寺域をひき継いだものかどうかが、今後の課題である。

## 2. 出土瓦の検討

### (1) 分類と出土傾向

出土した瓦は、軒丸瓦2種類、軒平瓦6種類、丸瓦、半瓦、鷲尾である。

軒丸瓦は、圧倒多数を鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦(NM1類)が占めている。NM1類は、範傷の進行や加彫から、2タイプに細分できる。NM1a類(拓本・実測図2、6、7、12、13、14)は、範傷により蓮子が1ヶ所つながっている。また、蓮弁にも直線的な傷が1ヶ所観察できる。これが、最も古い段階である。NM1b類(1、3、4、5、8、9、10、11)は、蓮子の傷が増え、4から7ヶ所でつながっている。また、弁半の子葉を深く掘りなおしている。圓線の間にも2ヶ所、新たな範傷を確認できる(第22図)。また、素文縁で中房に1+6の蓮子を配置した軒丸瓦(NM2類)が1点出土している(拓本・実測図15)。これは、今里幾次氏が提唱する「播磨國府系瓦」(註3)の「北宿式軒丸瓦」である。

軒平瓦NH1類、均整忍冬唐草文(16~20)は、灰白色を呈し、軟質で、緻密な胎土である。土墨状遺構調査区1から4点、塔跡から1点、講堂跡から1点出土した。凹面には、枠板压痕や、布綴じ合わせ日が観察できる資料があり、桶巻き作りによって製作された事がわかる。凸面はすべて、叩き目を丁寧にすり消している。NH2類は、へら描斜格子文軒平瓦(21、22、23、24)である。瓦当面にへら描で斜格子文を刻んでいる。凹面は、長手の叩き板によって、側縁と平行に叩いている。斜格子叩き目が残る資料がある。へら描唐草文軒平瓦(NH3類、25)は、瓦当面に、へら描で、稚拙な唐草文を刻んでいる。NH2類とよく似た胎土、色調であり、凸面に長手の叩き板で、連続的に叩きを施す点も同じである。おそらく同時期の資料であろう。(25)は、凹面に斜格子叩き目が残る。均整唐草文軒平瓦NH4類(26、27)は、「播磨國府系瓦」の「北宿式軒平瓦」である。均整唐草文軒平瓦NH5類(28)は、「播磨國府系瓦」の「長坂寺式軒平瓦」である。NH6類(29)は外区に珠文帯をもたない均整唐草文軒平瓦である。

丸瓦は、行基葺式と玉縁付式があり、図示した資料は、行基葺式(M1類)が1点(31)、玉縁付式(M2類)が1点(32)である。

平瓦は凸面の観察により、H1類(33、34)、叩き目を丁寧にすり消すもの。H2類、凸面に放射状叩きを施すもの。叩きのち刷毛調整するものを2a類(35)、櫛状工具を使用して調整するものを2b類(36)とする。H3類(37、38)、凸面に指頭压痕を有するも

の。H 4 類(39)、凸面に格子叩きを施すもの。H 5 類(40)、凸面に縄目叩きを施すもの。これらの製作技法を検討すると、H 1 類と H 2 類には、布の綴じ合わせ目や枠板圧痕、分割破面を確認できる資料があり、桶巻き作りによる製作であることがわかる。一方、H 3 類から 5 類は、枠板圧痕ではなく、布目は、側縁と平行しており、狭端面に布目がかかる資料があるなど、一枚作りであることがわかる。

鷲尾(30)は、1 点だけの出土である。縦帶および鱗部を沈線で表現しており、菱田哲郎氏が分類する「東播磨系鷲尾」である(註4)。出土破片は、全体に弧を描いて曲がっている形状であることから、前部側の破片と考えられる。

各造構における瓦の出土状態を示したのが、表2である。

表2 遺構別瓦出土点数表

軒丸瓦

	NM 1a 類	NM 1b 類	NM 2 類
塔	2	5	1
講堂	2	8	0
小堂宇	4	7	0
土壘状遺構	0	2	0

軒平瓦

	NH 1 類	NH 2 類	NH 3 類	NH 4 類	NH 5 類	NH 6 類
塔	1	1	0	0	1	1
講堂	1	3	1	1	0	0
小堂宇	1	1	0	0	0	0
土壘状遺構	4	0	0	0	0	0

平瓦

	H 1 類	H 2 類	H 3 類	H 4 類	H 5 類
塔	16	2	3	18	6
講堂	8	5	4	4	0
小堂宇	0	5	0	10	1
土壘状遺構	5	1	0	0	1

全体的に、各造構とも、各タイプの瓦が出土しており、造構により、瓦の種類が変わることはない。軒丸瓦は、NM 1 類が、塔、講堂、小堂宇など、すべての建物に共通して使用されていたと考えられる。また、軒平瓦では、数はかなり少ないが、NH 1 類が各建物から出土している。NH 2、3 類は、塔・講堂等から出土している。平瓦では、塔跡は 1 類が多く、16 点、2 類が 2 点と古いタイプが多い点が注意される。一方、小堂宇では、H 1 類ではなく、H 2 類が 5 点と少ない。全体的に、各タイプが、それぞれの建物から出土している。基壇周辺埋土から出土した瓦は、屋根に使用されていた瓦と基壇

に使用されていた瓦が混在していると思われる。各タイプの瓦が混在するのは、補修を繰り返した結果と思われる。軒瓦も、各タイプの瓦が遺構周囲から出土しており、屋根瓦も補修を行っていたのであろう。

## (2) 井内古文化研究室所蔵資料について

野口廃寺出土瓦については、井内古文化研究室が所蔵する資料が存在する。この資料については、発掘調査出土品にはない資料も含まれ、重要性が高い。井内潔氏に直接ご教示を得たところ、これらは、野口神社拝殿の西側から北西側の広い範囲から獲得した資料であるという。また、「播磨国府系瓦」については、拝殿西側から比較的まとまって出土したが、盛土の中から得た資料ではなく、その下の土から出土した資料であるので、他所より持ちこんだ資料ではないということであった。この教示から、これら資料を、野口廃寺に伴う資料と判断してよいと思われる。

『東播磨古代瓦聚成』に掲載されている瓦について、観察を行った。NH1類には、凸面に放射状叩きを施した資料があり、この資料がH2類と同時期のものであることを推測させる。また、素文系軒平瓦も存在する。これは、実見した資料では、灰白色の胎土で、凸面に放射状叩きを施していた。発掘資料のNH1類と胎土、色調などもよく似ており、放射状叩きも共通している。これも古い時期の瓦と考えられる。「播磨国府系瓦」は、「長坂式軒丸瓦」、「古大内式軒丸・平瓦」、「野条式軒丸瓦」、「北宿式軒丸・平瓦」などが知られ、鬼瓦片も1点存在する。今回の発掘調査では、「長坂式軒平瓦」、「北宿式軒丸・平瓦」が出土しており、両者を合わせると、「長坂式軒丸・平瓦」、「古大内式軒丸・平瓦」、「野条式軒丸瓦」、「北宿式軒丸・平瓦」が出土している。このことから、8世紀後半から9世紀までの長期にわたり、「播磨国府系瓦」が使用されていたと考えられる。

また、素文縁複弁八葉軒丸瓦1点も拝見した。これは、野口神社からいただいた資料と言う事である。発掘調査によっても、これと同じ瓦の破片1点が、本殿東側の調査区8から出土しているが、出土量が極めて少ないため、現状では位置付けは困難である。その他、『東播磨古代瓦聚成』に掲載されている単弁八葉蓮華文軒丸瓦と外区、周縁を欠く、複弁八葉蓮華文軒丸瓦については、今回の発掘調査ではまったく出土しなかった。

## (3) 出土瓦資料の時期区分

以上のことから、出土瓦の時期区分を以下のように行う。

I期瓦 軒丸瓦NM1類 軒平瓦NH1類

II期瓦 軒丸瓦NM2類 軒平瓦NH2類、NH3類、NH4類、NH5類

NM1類は、出土点数では軒丸瓦のほぼすべてであり、すべての基壇建物に使用されている。I期と考えるのが妥当であろう。ただし、NH1類のほうは、堂宇に伴う資料が少ない。このことから、明確にNM1類とNH1類を、創建期のセット関係と判断することはできない。西条廃寺発掘調査報告書では、「寺院創建瓦として軒丸瓦Iがあり、次に軒丸瓦II-a、b(中略)である。(中略)ところが、軒平瓦の出土はなく、使用しなかつたという古い寺院の瓦の様相をもっていたのである。」としている(註5)。野口廃寺に

ついても、素文系軒平瓦や、通常の平瓦なども軒先にも使用されたのかもしれない。Ⅱ期は8世紀中葉～9世紀の瓦である。「播磨国府系瓦」が8世紀後半～9世紀にかけて、連続して使用されたと考えられる。NH2、3類は、胎土や焼成、叩き技法など共通性が多く、同時期の資料と考えられる。また、井内氏所蔵資料の素文系軒平瓦については、先述した理由からⅠ期と考える。ここに述べた出土資料以外の軒丸瓦3種類（素文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦、單弁八葉蓮華文軒丸瓦、内区のみの複弁八葉蓮華文軒丸瓦）については、どのように使用されたのか、明確でないため、現在での位置付けは困難である。

### 3. 出土土器の検討

今回の報告書に掲載した土器は、出土した資料の一部ではあるが、各時期にわたる資料を掲載している。実測図番号41は、飛鳥IV期に併行する時期である。46は、8世紀中頃の時期である。43は、9世紀初頭頃と思われる。41、45、47、48、49、50、51は時期的に近い資料であり、志方窯跡群投松2号窯出土資料に概ね併行する時期で、9世紀中頃と考えられる（註6）。54は、志方窯跡群中谷3号窯出土資料と併行する時期と考えられる（註7）。52、53はやや時期が下る資料である。札馬5号窯出土資料に近い時期と思われる（註8）。55は11世紀代の資料である。

44は、野口廃寺の中で最も古い資料である。資料的には、9世紀中頃の資料が多く、これらは、小堂字跡、講堂跡埋土などからも出土している。瓦の状況とともに考えると、これらは野口廃寺の衰退期にあたる資料と考えられる。一方、10～11世紀代の資料も出土しており、9世紀中頃以降もまだ、寺院が何らかの形で、命脈を保っていた可能性を考えさせる。明確な年代がわからないが、寺院北東から検出された礎石建物は、礎石の根固めに瓦片を多く使用し、整地土内にも瓦細片を含むなど、時期の下る遺構ではないかと考えられる。この時期に対応する遺構の可能性もあると考えたい。

### 4. 周辺地域との関係

NM1類と同範関係にある瓦資料が、山南町の奥の丸山散布地（井原遺跡群）から出土している。実物資料を拝見した所、範傷の位置、形状は、NM1a類のものと一致し、古い段階の資料である。「奥の丸山散布地の周辺には、寺院に関連するとみられる地名が多く遺存し、この軒丸瓦の採集遺物と併せて古代寺院の存在が推定される地域」であるという（註9）。今後数量的に多く出土すれば、両者の関係について考える手がかりを得られるであろう。また、小野市広渡廃寺からも、1類と類似する資料が多く出土する（註10）。これも鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦であるが、一葉のみ3弁からなっており、範が異なることは、一見して判断できる。加西市殿原廃寺例（註11）では、さらに退化して、細弁16葉蓮華文軒丸瓦となっている。これらは野口廃寺より後出の瓦と考えられる。また、龍野市小神廃寺からも、鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している（註12）。これは、中房の蓮子が1+6となっている。

忍冬唐草文軒平瓦は、小野市新部大寺廃寺、加西市繁昌廃寺、吸谷廃寺等でも出土している。野口廃寺例は、これらに比べて文様が非常に硬化している点が特徴である。また、平瓦には、凸面を櫛状工具で継に撫でつけた資料、H2b類がある。これと同じ技法が、加西市殿原廃寺などにも見られる。鷲尾は、「東播磨系鷲尾」である。このタイプは、「胴部、鰭部の施文に沈線を用いる」点が特徴である(註13)。明石市太寺廃寺、小野市広渡廃寺、新部大寺廃寺、加西市繁昌廃寺など、東播磨各地で出土している。

また、資料的にわずかであるが、素文綠複弁八葉蓮華文軒丸瓦は、類似資料が姫路市辻井廃寺、市之郷遺跡、中町多哥寺遺跡などから出土している。

これらのことから、野口廃寺は、播磨周辺地域とのつながりが強いが、特に加古川流域の瓦工人集団との間に、相互的に深い関係を有している寺院であったと考えられる。

## 5. 寺院の立地

野口廃寺は、野口段丘上に立地し、古代山陽道や賀古駅家に近接する位置にある。また、「播磨国府系瓦」を多く出土することなどの特徴をもつ。

古代山陽遺跡については、条里制造構の余剰帶の研究から想定線が考えられているが、考古学的にも、明石市教育委員会による明石市二見町福里遺跡と魚住町清水遺跡の調査によって、それを裏付ける成果が得られた(註14)。調査結果によると、清水遺跡では、道幅は約8mで、両端に幅約70cmの素掘りの側溝が掘られていた。一方、加古川市域の古代山陽遺跡については、余剰帶の存在から、駅ヶ池の南側土手から、城の池北側土手を結ぶ直線道が想定されている(第2図)。これは、野口廃寺の南西、約400m程の位置である。

賀古駅家跡については、古大内遺跡が該当すると考えられている。今里幾次氏は、『加古川市史第1巻』において、古大内遺跡について詳述をしている。賀古駅家跡とする根拠について、隣接する駅ヶ池の存在や、『日本往生極樂記』に「私はこれ播磨國賀古郡賀古駅の北の辺に居住せる沙弥教信なり」と記されており、現存する教信寺は、教信の遺跡がその後、寺院として発展したものであると考えられること、古大内遺跡は、かつて古大内廃寺と称されていたが、塔・金堂などが検出されたわけではなく、塔心礎なども発見されていない。出土する古瓦類は、「播磨国府系瓦」5組が出土しており、播磨国府系瓦のみの出土で終始することなどから、この遺跡を賀古駅家跡と推定してよいと論じている。「播磨国府系瓦」は「国分寺式II型」から出土があり、8世紀後半以降の存在を確認できると言う。加古川市教育委員会は、1982年および2004年に、小規模な発掘調査を実施したが、明確な遺構は検出されていない。加古川市教育委員会所蔵の出土瓦を観察すると、丸瓦は玉縁付式、行基式双方があるが、圧倒的に玉縁付式が多く、野口廃寺とは様相が異なる。また、平瓦は、格子叩き、繩目叩きが非常に多く、これも野口廃寺とは様相が異なるように思われる。

駅路の整備について本木雅康氏は、「歴史地理学の分野では、天智朝(在位668~671)ご

ろには、駅路の整備がかなりの地域において進められたとみられている。」(註15)と記されており、7世紀後半頃には各地において整備されたようである。初期寺院が街道沿いに造営される例が多い事は、よく知られている。播磨地方においても、多くの初期寺院が街道近くに造営されている。平安時代初期に書かれた『東大寺諷誦文稿』には、法会を行うための堂の条件を詔める箇所に、「駅道之辺、物毎に便あり」と記しており、駅路沿いが良好な立地条件であると、考えられていた事が知られる。また、龍野市教育委員会の岸本道昭氏は、「建立集団の勢威を示す、政治的記念物のような側面も強かったのではないか」と述べており(註16)、街道沿いに寺院を造営することの、政治的意味を強調している。野口庵寺の造営に当たっても、その立地について、利便性の問題や政治的意味付けなどが、考慮されたと考えられる。

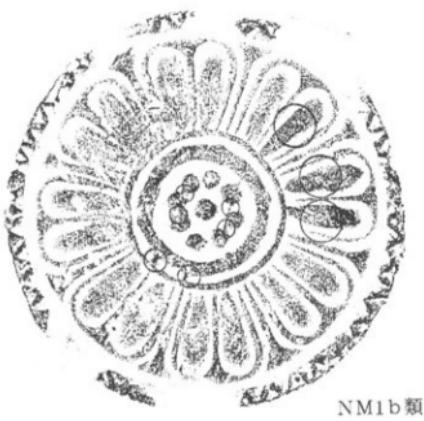
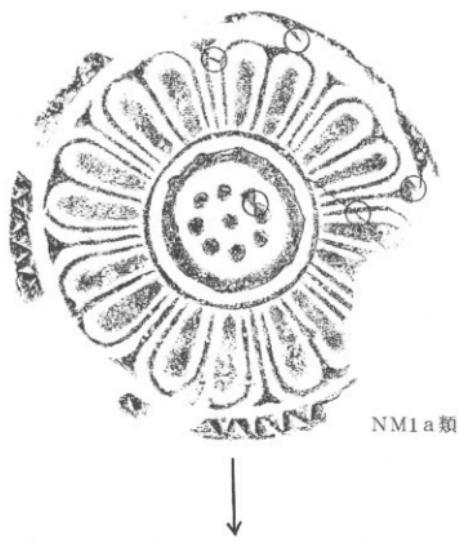
## 6. 寺院の時期と性格

野口庵寺の創建については、金堂が未検出であるため、明確にし得ないが、遅くとも白鳳時代終末頃には、その姿を現していたと考えられる。權越は、賀古郡の有力豪族であろう。ところで『播磨國風土記』には、「駅家里」の記載があり、「由駅家為名」と記されている。先述の古大内遺跡が賀古駅家跡と想定されるので、野口庵寺も駅家里に属していたと考えられる。一方、『和名抄』高山寺本には、駅家里の記載は無く、賀古郷の記載がある。このことについて『兵庫県の地名Ⅱ』では、「郡名を郷名とすることから郡衙・駅家所在郷と考えられ、播磨國風土記にみえる駅家里と同一地域としてよからう」としている(註17)。賀古郡衙の所在地は、まだ明確ではない。ただし、官衛関連の遺跡としては、加古川町溝之口遺跡から、「大穀」と書かれた墨書き土器が出土している。律令期の軍團制において、大穀は600人、800人の兵士を率いる長であった。また、北側に隣接する美乃利遺跡の河道路跡からは、「郡」と書かれた墨書き土器が出土している。これら官衛との関連が推測される遺跡は、野口庵寺から約1.7km～2kmと、比較的近い距離に存在している。

一方、8世紀後半になると、出土する瓦に「播磨國府系瓦」が見られるようになる。これについて今里幾次氏は、「野口庵寺が途中から定額寺に指定されたのではないか」ということである。奈良末・平安初期ころから私寺の設置を防ぐため、一定の数を限り官寺に准ぜしめた寺が定額寺であるといわれる。定額寺に列せられると造営修理は權越と国司が検査しその費用は官給されること、平安中期以後この制度が全廃されたこと等が知られており、このことは野口庵寺の古瓦に、よく当てはめられる様相である。(註18)と述べている。播磨国における定額寺の存在については、『日本三代實錄』貞觀10年(868)7月条に「十五日内午播磨國言今月八日地大震動諸都官舍諸定額寺堂塔皆悉類倒」と記されている事が、重要な根拠になるとされた。1995年刊行の『播磨古瓦の研究』においても、その1郡1寺的な方から、播磨國府系瓦を出土する、主な白鳳寺院を定額寺と考えられている。また、菱田哲郎氏は、この説を支持し、「播磨國府系瓦」を出土する

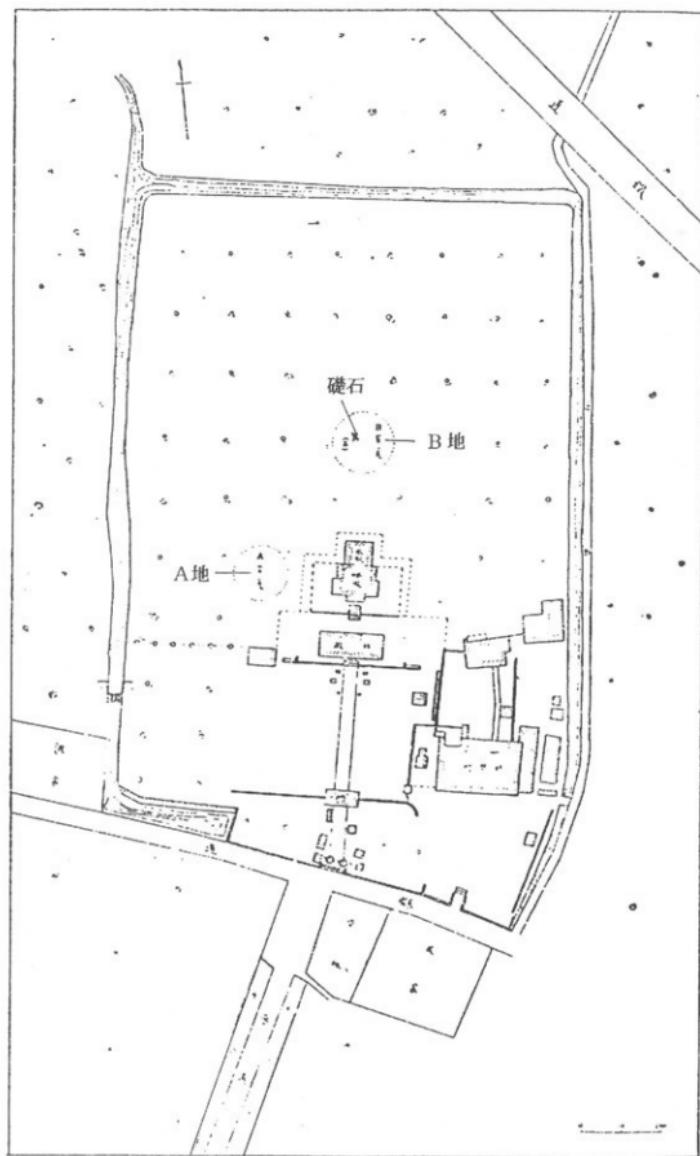
白鳳寺院が、播磨国各郡における代表的寺院を含むこと、郡衙推定地に近い寺院が多いこと、この状況が讃岐国における補修型寺院にきわめて近似していることなどを論じた（註19）。「播磨国府系瓦」を出土する寺院は、箭磨郡で見野廃寺、市之郷廃寺、辻井廃寺。揖保郡で下太田廃寺、金剛山廃寺、奥村廃寺など多いが、他の郡では、明石郡太寺廃寺、神崎郡溝口廃寺、赤穂郡与井廃寺、佐用郡長尾廃寺など1郡に1寺程度の郡が比較的多く見られる。また、郡衙推定地に近い寺院は、太寺廃寺、与井廃寺、長尾廃寺、小神廃寺などが見られる。野口廃寺も先述した理由から、それらの条件に合う可能性があると考える。

この寺院は、貞觀10年の地震により、被害を受けたことが推測される。軒瓦は、「北宿式」まであり、土器も、9世紀中頃の土器が比較的多く廃棄されている。しかし、土器については10～11世紀代の資料も少なからず見られ、寺院がその後も、しばらく命脈を保って存続していた可能性も伺わせている。



第22図 范傷等位置図

- 註(1) 鎌谷木三次『播磨上代寺院址の研究』 1942年
- (2) 井内古文化研究室『東播磨古代瓦聚成』 1990年
- (3) 今里幾次『播磨古瓦の研究』 1995年
- (4) 菅田哲郎「鳴尾の生産と地域色」『古代文化』 第40巻 6号 1988年
- (5) 西口和彦・岡本一士『西条庵寺発掘調査報告書』 加古川市教育委員会 1985年
- (6) 森内秀造「投松2号窯出土遺物の概要」「志方窯跡群Ⅱ投松支群」 兵庫県教育委員会 2001年
- (7) 森内秀造「中谷3号窯出土遺物の概要」「志方窯跡群Ⅰ中谷支群」 兵庫県教育委員会 2000年
- (8) 中村浩「考察」「札馬古窯跡群発掘調査報告書」 加古川市教育委員会 1982年
- (9) 「奥の丸山散布地」「山南町文化財のすがた」 山南町 2000年
- (10) 高井悌三郎他『播磨広渡寺庵寺跡発掘調査報告』 小野市教育委員会・広渡寺庵寺跡発掘調査団 1977年
- (11) 森幸三『殿原庵寺(第4次)』 加西市教育委員会 1993年
- (12) 岸本道昭『小神庵寺発掘調査報告』 龍野市教育委員会 1992年
- (13) 註4と同じ。
- (14) 稲原昭嘉『太寺庵寺と高家寺』 明石市立文化博物館 2004年
- (15) 木本雅康『古代の道路事情』 吉川弘文館 2000年
- (16) 「古代寺院からみた播磨」 第3回播磨考古学研究集会実行委員会 2003年
- (17) 今井林太郎監修『兵庫県の地名Ⅱ』 平凡社 1999年
- (18) 今里幾次『加古川市出土の古瓦』 1970年
- (19) 菅田哲郎「考古学から見た古代社会の変容」「日本の時代史5平安京」 吉川弘文館 2002年



第23図 野口廃寺跡実測図(播磨上代寺院址の研究より)

# 写 真 図 版

写真図版一 野口廃寺周辺航空写真一



写真図版二 野口廃寺周辺航空写真二



写真図版三 講堂跡調査写真一



講堂瓦積基壇北面  
(調査区1)



講堂瓦積基壇北面  
(調査区1)



講堂瓦積基壇北面  
(調査区1東より)

写真図版四

講堂跡調査写真二



講堂瓦積基壇北面  
(調査区 2)



講堂瓦積基壇北面  
(調査区 3)



講堂瓦積基壇北面  
(調査区 4)



講堂瓦積基壇北東隅  
(調査区 5 南より)



講堂瓦積基壇北東隅  
(調査区 5 東より)



講堂基壇調査区 6  
(東より)

写真図版六  
講堂跡調査写真四



講堂基壇調査区 6  
(西より)



講堂基壇調査区 7  
(北より)



講堂基壇調査区 7  
(西より)



小堂宇瓦積基壇北面



小堂宇瓦積基壇北面



小堂宇瓦積基壇北面  
(東より)



小堂宇瓦積基壇西面



小堂宇瓦積基壇南面

写真図版九 土壌状遺構調査写真



土壌状遺構調査区1  
(西より)



土壌状遺構調査区3  
(東より)



土壌状遺構調査区4  
(西より)

写真図版十  
北東建物跡調査写真



北東建物跡  
(北西より)



北東建物跡  
(北より)



北東建物跡  
(北東より)



塔瓦積基壇南面



塔瓦積基壇西面



塔中央部調査区  
(南より)

写真図版十二 塔跡調査写真二



塔瓦積基壇北面



塔瓦積基壇東面



調査区8  
(南より)

写真図版十三 軒丸瓦写真



1



2



3-1



(瓦当裏面) 3-2



4



5



6



7

写真図版十四  
軒丸瓦写真



9-1



(瓦当裏面)9-2



8



10



11-1



(瓦当裏面)11-2



12

写真図版十五 軒丸瓦・軒平瓦写真



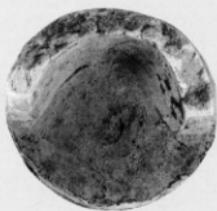
13



14



15-1



(瓦当裏面)15-2



(凹面)16-1

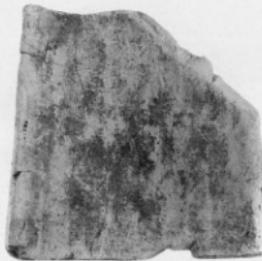


(凸面)16-2



(瓦当面)16-3

写真図版十六  
軒平瓦写真



(凹面)17-1



(凸面)17-2



(瓦当面)17-3



(凹面)18-1



(凸面)18-2



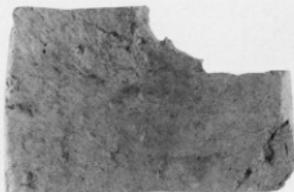
(瓦当面)18-3



19



20



(凹面) 22-2



(凸面) 22-3



(瓦当面) 22-1



21



23



24

写真図版十八  
軒平瓦写真



(凹面)25-2



(凸面)25-3



(瓦当面)25-1



26



27



28



29

写真図版十九 鳥尾・丸瓦・平瓦写真



30-1



(裏面)30-2



(凸面)31-1



(凹面)31-2



(凸面)32-1



(凹面)32-2



(凹面)33-1



(凸面)33-2

写真図版二十 平瓦写真



(凹面)34-1



(凸面)34-2



(凹面)35-1



(凸面)35-2



(董状压痕)35-3



(分割破面)35-4



(凹面)37-1



(凸面)37-2

写真図版二十一 平瓦・土器写真



(凹面) 38-1



(凸面) 38-2



(凹面) 39-1



(凸面) 39-2



(凹面) 36-1



(凸面) 36-2



(分割破面) 36-3



写真図版二十二  
平瓦・土器写真



(凹面) 40-1



(凸面) 40-2



46



47



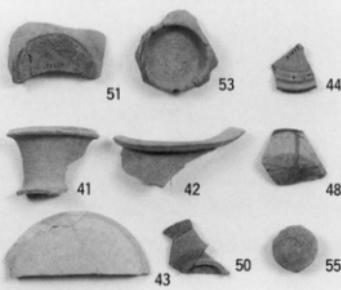
49



52



54



# 報告書抄録

フリガナ	ノグチハイジハックツチョウサガイヨウホウコクショ						
書名	野口廃寺発掘調査概要報告書						
シリーズ名	加古川市文化財調査報告						
シリーズ番号	19						
編著者	西川英樹						
編集機関	加古川市教育委員会 文化財調査研究センター						
所在地	加古川市平岡町新在家1224-7						
発行年月日	平成16年11月30日						
所取遺跡	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
野口廃寺	兵庫県 加古川市 野口町野口 326	市町村 28210	34度 75分 26秒	134度 85分 93秒	平成6年 8月1日～ 平成8年 3月29日	1,100m <sup>2</sup>	範囲確認 調査
所取遺跡名	種別	時代	遺構	遺物	特記事項		
野口廃寺	寺院跡	奈良時代～平安時代	塔跡 講堂跡 附属建物跡	瓦・土師器・須恵器・釘			

---

加古川市文化財調査報告 19

## 野口廃寺発掘調査概要報告書

2004年11月30日発行

編集・発行 加古川市教育委員会 文化財調査研究センター  
〒675-0101 兵庫県加古川市平岡町新在家1224-7  
TEL(0794)23-4088

印 刷 丸山印刷株式会社  
〒676-8566 兵庫県高砂市神爪1-11-33

---